
小さな恋 ～ The green world ～

彩瀬姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな恋 The green world

【Nコード】

N8000G

【作者名】

彩瀬姫

【あらすじ】

小学六年生の和幸は、ゴールデンウィークに初めて、田舎のおばあちゃん家に行くことになる。そこで出会ったのは同い年の少年、サト。緑が沢山ある自然の中、「緑の世界」での、小さな小さな恋物語。——いつの間にか恋に落ちていた。手をつないで、ずっと二人一緒にいたいのに……

プロローグ（前書き）

この話はボーイズラブです。苦手な方はご注意ください。
ラブ要素は、ほとんどないのでご了承ください。

ブローグ

「わぁー！ー！ー！すげえっ。緑だらけだっっ」

俺は車の中から大きな声で叫んだ。

俺が住んでいた都会とは、全く違う風景。ビルも信号も、コンビニもない。それがとても新鮮だった。

そんな俺に母さんは一喝。

「和幸っ。あんまり大きな声出さない。田舎だから声が響くのよ」
「分かったよっ」

すごく気持ちよかったのに駄目と言われて俺は少しガッカリ。
大型連休ゴールデンウィーク。

俺——きたのかずゆき北野和幸は、おばあちゃんの住んでいる田舎町に来た。

お母さんの故郷の町でもある。

遠いから、家を真夜中に発車した。今はもう八時。もう5時間ぐらい車を走らせている。

——実は俺は此処に来たのが初めてで、少し楽しみにしていた。
小学六年生の俺の、最後の大きな休み。

夏休みがあると思うかもしれないけど、夏休みには中学受験の勉強を始めなければいけないため、遠いおばあちゃん家に行くことができない。

だから、ゴールデンウィークを使っておばあちゃん家に行くことになったのだ。

それだったら、俺が忙しくなる前におばあちゃん家に連れて行ってくればよかったのに……。

「ほら、見えてきたわよ。あそこがおばあちゃんの家」

母さんが指を指す。

俺は母さんの指差した方を見た。そこには大きな家があった。

「おおー！ー！でっけえー！ー」

木造建築の家。

昔って感じな家。ここで5日間住むと思うとワクワクしてくる。

男の子の冒険意識を高鳴らせた。

「やつほいーーーーー!!」

両手をあげて叫んだ俺に、母さんはゲンコツをくれた。

「痛いよ母さん……」

——俺はこのゴールデンウィークに、とても大事な想い出をつくることになる……。

第1話「山奥に住む少年」

「着いたわよ」

大きな木造建築の家の前。

「近くで見ると本当に大きい……」

「そうね……。築100年とか言ってたわ」

その言葉に俺は素直に驚く。

「ええ！？100年！？」

なんかすごい感動した。築100年とか聞いたことあるけど、生で見られるなんて思ってもみなかった……。

俺は目をキラキラ輝やせていると、父さんが苦笑混じりに溜息をつく。

「本当、お前こつゆうの好きだよな。連れてきた甲斐があった……」

長時間の運転が疲れたらしく、父さんの意気がない。

「凌ちゃん。年ね、と・し」

父さんの肩をしばしと叩いて母さんは言う。

自分の夫にそういうこと言うか？

とツツコミたいところだが、父さん的にはこの雰囲気が好きと言っていたので、言わないでいる。

建物ばかりに驚いていたけど、ゆっくりと息を吸ってみると空気が澄んでいるのが分かる。

周りは緑ばかりで、人が住んでるのか？と本当疑ったぐらい、木や花ばかり。

俺、花粉症じゃなくてよかった。

花粉症だったらこんなところに5日間もいられそうもない。

「はーくしょんっつ」

山中だから、少し肌寒い。春なのにこの寒さ。なんか違う意味の感動が俺の中を支配している。

「風邪ひくと大変だから、中に入りなさい」

いつの間にかおばあちゃんが玄関で待っていてくれたみたいだ。

ニコニコと笑っている。

「えっと、こんにちは」

おばあちゃんと言っても正体面なので、一応挨拶してみた。
するとおばあちゃんは、驚いたように固まる。

「あーお利口さんに育ったのねえ……あの和ちゃんが……」

和ちゃん！？

それは小さい時に言われていた呼び名。

なんで俺と一度もあったことのないおばあちゃんが、俺の昔の呼び名を知っているんだ？そう、母さんに視線を向けると、笑顔で答えてくれた。

「あー私が電話で和幸の話する時、分かりやすく和ちゃんと呼んでいたからよ」

それは嫌がらせか。と母さんを睨むが効力はなかったらしく、逆に楽しそうににこにこしている。

和ちゃんという呼び名は小さい頃に呼ばれていたが、あまり好きじゃなかった。

男なのに、なぜちゃん付けなんだと思ったからだ。背が小さいということもあり、そう呼ばれていた。

——この悪魔めえ……。

どうやら母さんの中に悪魔が住みついているらしい。

母さんが俺が嫌がるのが好きらしい。母さんが嫌がることを達成した時の笑みは、まるで天使のように明るく、そして悪魔のように不気味だ。

「あの……和ちゃん、じゃなくて和幸って呼んでください」

ぺこりと頭を下げると、おばあちゃんは笑ってこう言った。

「和幸って言うより、やっぱり和ちゃんの方がしっくりくるから。

このまま和ちゃんって言うわねえ」

血筋なのか？これは遺伝的なものなのか？

おばあちゃんまでもが、ニコニコと悪魔の笑みを浮かべている。

「はあ……そうですか」

もうこれは断念するしかないと思い、曖昧な返事をしておいた。

「あつ、さこ惺くん。どうしたの、こんなところで」

おばあちゃんが声をあげる方に振り向いて見ると、男の子が一人、木の陰に隠れていた。

本を持っていて眼鏡をかけている。いかにも勉強してますって感じの子で……。

声をかけようとしたら、男の子はオレにじーっと見て、ササッと逃げてしまった。

「ええ……つとお……」

呆然としている俺を見て、おばあちゃんは苦笑しながら、話してくれた。

「あの子、お隣さんの渡辺惺くん。わたなべさとし不器用な子でね……」

こんな山奥にも子供っているんだなあ……。

若い人はみんな都会に行ったんだと、勝手に思っていた。

「惺くんは、この町で唯一の子供。他に誰も子供がいらないだよ」

——それって、友達がいないってこと……？

直感的にそう思った。周りに同じぐらいの年の子がいなければ、友達ができるはずもない。

おばあちゃんの表情も声もどことなく淋しそうで。

「本当はあの子を、この町から出してやりたいんだけどねえ……」
ぼつりとおばあちゃんが呟いた。

よく聞き取れなかったのもう一回聞こうとしたが、おばあちゃんはまだただ黙っていた。

……惺くんか。今度話してみたいな。

俺は「彼と友達になりたい」そう思っていた。

第2話「自然」

「ばーちゃん。これすんげえー美味いつつ」

今俺は、とても感動している。

「漬物がこんなに美味いと思ったの初めてー!」

その言葉がよほど嬉しかったのか、ばーちゃんはうつすら涙を浮かべている。

「そうかいそうかい。ばーちゃんは嬉しいよ……」

この短期間で、すっかりばーちゃんと仲良くなった。

「和幸。そう言ってられるのは今のうちよ。これを毎日出されてみなさい。絶対飽きるから」

母さんは呆れるように言う。多分、いや絶対、毎日この漬物を食べさせられたに違いない。そうすればいつかは飽きるかもしれないけど、今美味ければいい。

俺は母さんみたいに毎日食べるわけじゃないし……。

だが、それは甘い考えだったようだ。

「ほら、和ちゃん。これも漬けものだよ。どんどん食べて」

「……ええ？」

啞然としている俺を見て、母さんほらいったつと笑っている。

山のように盛られた漬物。さすがこんなに食べられない。こんなに食べたら、塩分取り過ぎになるって……。

どうにかしてばーちゃんを止めようとするが、あの悪魔の笑みにはどうも勝てそうにない。

今はしょうがなく漬物を食べまくった。

「ほらガンバ!! 和幸!!」

「お父さんも応援してるぞ!!」

と自分たちの漬けものまで俺に寄こしてくる。

自分のものは自分で食べよと言いたいが、口の中に次々と漬物が入るので言えない。

それから30分後――

「ばーちゃん……。さすがにもう食べられない…ギブアップ」

白旗を上げた俺を見て、ばーちゃんの一言。

「しょうがないね。あとこんだけだから頑張れ」

ええ？まだあるの？

嫌だと言おうと思うのだが、やっぱりばーちゃんの笑みが怖くて
言えなかった。

* * *

「はぁー食った食ったぁ……」

ご飯と漬物だけだけど、十分お腹いっぱいになった。

ばーちゃんの家には、テレビもないし、もちろんゲームもない。

ここにも暇だ。

腹ごなしに惺くんに会いに行ってみよっかな……。

ということで惺くんの家を訊いてみた。

「ねえー惺くんの家ってどこ？」

「ええ！？」

母さんもばーちゃんも、疲れていて寝ていた父さんも飛び起きた。
何かいけないことでも言ったかのように、みんな驚いていた。

「どうして？」

母さんの声が妙に引きつっている。

「惺くんって友達いないみたいだから、友達になりたいなあーと思
って……。ええつと駄目？」

話しているうちにみんなの顔はだんだん険しくなっていくのを感じ
て、話している俺の声がだんだんと小さくなっていった。

「駄目じゃないよ。ただ驚いただけよ」

なぜか苦笑いされた。

「ちっ地図渡すわね。お隣って言うてもここから5分はかかるわよ
？」

引き出しの中にある地図を探しながら母さんと言った。

「ええ？そんなにかるの？」

地図が必要なほど遠いんだな。

それじゃあ、お隣って言わないじゃん。と思うのだが、この親子にツツコミすると危険なのでしない。

母さんは大きな地図をテーブルに広げる。

「えっと、このへんがおばあちゃんの家で、惺くんの家は……このへん！！かなあ？」

母さんは一生懸命教えてくれるのだが、全くと言って意味が分からない。

まず、この地図を出すところで間違っている。だってこの地図、

「世界地図」だよ？

これじゃさっぱり分かりませんよ……。

二人の話を聞いていたばーちゃんが口を出す。

「美世子。惺くんは家にはいないよ。たぶんまだこの辺にいると思う。昨日もこの辺で何かしていたみたいだから」

「あら。そうなの？」

あからさまにガツカリした様子。母さんは方向音痴だから、地図の見方もきつと分からなかったのだろう。

「惺君は、自然が好きだからね」

「じゃあ、その辺歩いてくるっ」

俺は玄関ではなく、大きな出窓から家を出た。

この家の庭は大きく走ると、とても気持ちいい。家の周りは木や花が永遠と続いている。寒い場所だから、まだ桜も咲いている。

まるで緑の世界の中にいるみたいだ。

「和幸いーーーー！！」

母さんが僕の名前を呼んだ。

「何ーーーーー？」

家から遠くまで来たので、母さんの声が小さく聞こえる。それでもまだ声が聞こえるのだからすごい。

「5 時前には帰ってこない。いいわね？」

随分門限が厳しいんだなっと思ったが、はじめてきた土地だし、心配になるか。

「わかったー」

そう言っで、俺は緑の世界に飛び込んでいった。

第2話「自然」(後書き)

次の話は惺君^{せいくん}登場です!!

第3話「少年とのであい」

とぼとぼ歩いて2・3分。周りは緑だらけで建物も、人の影すらなく。

俺、どこに行けばいいんだあ？

今頃だが、そのことに気付いた。まあ……この辺ぶらぶらしてれば会えるだろうと考えていた。

だが、ここで俺はとても重大なことに気付いた。五時までに帰ればいいって言ってたけど……。

俺、時計持つてないよ？

今の時間すらわからないつ。こうなったら早く惺くんを探さねば！……と思うのだが、

「はあ……どこを探すっかなあ……」

溜息交じりの声で呟いた瞬間。

ゴソゴソッ

草の陰が、突然ゴソゴソッと揺れた。

………な、何かいるのか？

蛇？スネーク？

どっちも同じ生き物だよ。とパニックっている自分自身にはツッコミできず……。

もしかしてクマ？

もう、そんな考えしか浮かばない。とにかく近づいてみないと何か分からないと、俺は恐る恐る動く草の陰に近づいてみる。

一歩、二歩、三……

「ギャーーーーー」

俺は大きな奇声を上げた。

「ああ」

そこには目をぱちくりさせている少年がいた。虫とか蛇とかクマとかならいると思ったが、まさかそこに人がいると思わなかった。

「あれ？ 惺くん？」

よく見れば、さつき会った惺くんだった。惺くんは、突然奇声を上げた俺に驚いたようだ。

「なっ、何してるの？」

草の中何かをしている惺くんは、興味を持ったので聞いてみた。無愛想な彼は、一言で答える。

「クローバー探し」

「クローバー探しい？ って、もしかして、四つ葉のクローバー？」

コクコクと顔を縦に振る。

無愛想な顔の割には、考え方は子供っぽい……。もっと惺くんに興味がわいてきた。

「あつ 惺くんは幸せになりたいの？」

「違う」

思いつきり睨めつけられた。

「じゃあなんで、クローバーを探しているの？」

一瞬詰まって惺くんはぼそりと呟く。

「本当の自由を探しているから」

「…… 本当の自由？」

どこが不自由なのか、俺には分からなかった。

惺くんはだつて現に、一人クローバー探しをしている。これのどこが不自由なのか……。

好きなことをしているのに、これのどこがいったい不自由なのか、このときは俺にはさっぱり分からなかった。

惺くんは何かを見つけたらしく、俺の後ろを指差した。

「あつ、カズ。そこに蜘蛛くもがいる」

「ええー！ 蜘蛛お！？ どこ？ どこ！？」

俺は、蜘蛛が大の苦手だ。昔、小さい頃、俺の頭に母さんが蜘蛛をのせたことがきつかけだ。

蜘蛛という言葉聞いて混乱している俺を見て、惺くんはうつすら笑った。

「嘘」

「……ええ？」

情けな声を出した俺に、もう一度同じ言葉を強調して言ってくれた。

「嘘だつて言つたんだ」

「ええ！？嘘？」

「うん。嘘」

「……………」

なんなんでしょうか。

この村の人たちは、みなさん……『S』なんですか？人をからかうのが好きな人種なんですか！！

そう問いたくなるほど、母さんもばーちゃんも、そして惺くんもサドっ気がある。

「カズは蜘蛛が苦手だね」

くすくすと笑いだした。

「ええ？」

さつきも聞いたけど、惺くんが俺のことをカズって……。

「カズって俺のこと？」

そう問いかけると惺くんの顔から血の気が引いた。

「ああ！」

惺くんは慌てて口を閉じた。しまつたと顔をしている。

——どうして俺の名前知っているんだろぅ？

素直な疑問。惺くんとは、初めて会ったのに……なんで？

「惺くん、俺のこと知ってるの？」

首をブルブル横に振る。

「じゃあなんで俺の名前知ってるの？あつ、もしかしてばーちゃんから聞いたとか？」

この質問にも惺くんは首を振る。

知らない知らない、答えすべてを拒絶するように、首を振り続ける。

俺に少し怯えているのか、目が少し潤んでいる様に見える。

「じゃあなんで俺のこと知ってるの？」

「……………」

口を開こうとしてくれない。俺の視線にいたたまれなくなったのか、下を向いてしまった。

「惺くん？」

「……………っふう…っ」

「うん？」

顔を覗くと、惺くんはいつの間にか涙がこぼれていた。

「ええ？ちよっちよっとな惺くんどうしたのお！？」

俺が泣かせたのか？問い詰めすぎがよくなかったのか？

今日何度目か分からない混乱。

ただ、今は惺くんを落ちつかせることしか考えられなかった。泣きやんでほしいとしか考えられなかった。

「ごっごめん。悪いことしたなら謝るから……………お願い泣かないで？」

惺くんの背中を優しく撫で、空いている手で頭を撫でた。

優しく、優しく。

——惺くんが泣きやんでくれますようにと祈りながら……………。

第4話「俺と少年」

「大丈夫？」

背中と頭を優しく撫でていると、惺くんの嗚咽がだんだん止まってきた。

「うん……大丈夫」

頭を押さえながら、惺くんは俺の方を向いた。

「頭痛い？」

「ちよつとだけ……」

苦しそうに顔を顰める。

このままだと惺くん一人で帰れないよね……。？
そこで俺が考えたのは、

「惺くんの家に送って行く」

だって、ほつとけない。惺くん苦しそうだし……。どう見ても大丈夫そうじゃない。

だが、惺くんは大丈夫だと俺の申し出を断る。

「駄目だ。ほつとけないっつ」

惺くんの体を支えようとするが、拒否されてしまう。

それが、俺にとつてとてもムカついた。

「そつそりやー俺達、まだ会って間もないけどさ……。体、小さくて頼りないかもしれないけど、ね？」

でも今はムカついている場合じゃない。惺くんの顔色がだんだん悪くなつていくのが分かった。

ゆっくりと手を差し伸べるが、惺くんは俺の手をバシッと振り払う。

激しい拒絶。

そこまでする理由が俺にはよく分からない。

俺が首を傾げると、惺くんは俺の肩をガシッと掴んで、真剣な瞳で見つめてきた。

「それなら——てよおっつ!!」

俺の肩を大きく揺さぶり、強い口調で惺くんは訴えてきた。
でもその言葉をしっかりと聞き取れなかった俺は、どう答えていいのかわからなかった。

ただ惺くんは辛そうな目で、俺のを見つめている。さっき見たいに泣きそうな潤んだ目で……。

——何分、そうしていただろうか？

惺くんは何かを諦めたかのように溜息をつき、俺の肩を掴んでいた手をゆつくりと離れた。

「覚えてないんだ……？」

何を？と、問い返そうとする前に惺くんは俺の前から逃げてしまった。

追いかけてよと思うのだが、草むらの中に逃げられたら、この辺の地域がない俺が探すのは困難だった。

* * *

「あらーお帰りー」

しょうがなくばーちゃんの家に戻ると、母さんが庭の花に水やりをしていた。

「ただいま」

「早いわね。まだ3時よ？」

母さんはからかうように、言葉を付け足した。

「もしかして、おやつの時間だから帰ってきたのかしら？」

「ただだけ自分の息子を……」。

それを考えるだけでムカついてきたので、ここはすべて溜息で流してしまうことにした。

「惺くんに会ったんだけど……、ちょっと……」

なんとも説明しにくい状況で帰ってきてしまったので詳しく説明できず、言葉を濁すことしかできなかった。

「そう…。まあーあの子是不器用な子だからね…勝手に逃げっちゃったんでしょ？」

ちよつと違う気もするが、一応合ってるので頷いておいた。

——惺くんはなんで泣いたんだろう？

——覚えていないって何？

よく分からないことが沢山あり過ぎる。

「おやつ時間よー」

ばーちゃんは出窓から叫ぶ。

「分かった——」

返事すると、母さんは口をそつと、俺の耳元に近づける。

「おやつって言っても、漬けものよ？」

母さんが付け足したその言葉に、俺は苦笑いするしかなかった。

第4話「俺と少年」(後書き)

一日三話書いても終わらない気がする……(汗)

第5話「遠い日の夢」

「ばーちゃんつつ、もうーいいよ。このままだと俺。史上初…史上初っ！漬物を食い過ぎて死んだ男になるからつつ。お願いだからやーめーてえー」

漬物と奮闘中の俺。

漬物を今日一日で、何キロ食べたんだろうと思うぐらい本当にたくさん食べた。

「おばあちゃん。和幸が可哀想。せめてこれぐらいにしてあげないと」

と母さんは、俺の前に自分の漬物を、そして――

「和幸。はいっ、お父さんのもあげるよ。育ち盛りの子は食べないとな？」

お父さんまでもが俺の前に漬物を……。というか、このパターン前にもあったようなないような。

いい加減に切れてきた俺は、みんなに一喝っ。

「俺を漬物星人にするなつつ！！！」

どこかズレタ発言をした俺。すると三人は同時に口を開いた。

「いいじゃん面白いから」

うわぁっ、ハモった……。

母さんとばーちゃんだけでなく、お父さんまでもがSに……。

もうこればかりはしょうがないと俺は一人早く夕食を食べ終え、風呂に入った。

山奥の風呂ということで五右衛門風呂だった。初めて入ったので、ついつい入り過ぎてしまった。

お風呂を出た後、疲れたあーつと、シングルベットに横たわる。

俺は今日一日のことを思い返す。

いろいろあったけど、今回ばーちゃんの家に来て分かったのは、俺はゼツテえーここに住めない！！ということだ。

「はあ~~~~~」

盛大な溜息をついた。

「ばーちゃんも母さんも俺を苛めやがって……」。

不意に窓に目を向けると、とてもキラキラと輝いたものが見えた。

「ああ…星が見える」

一瞬にして怒った気持ちが無くなってしまった。

窓から見えたのは星。

都会ではなかなか見ることができない星。ここでは毎日見れるのか……。

そう思えば、ここに住めるかとも思える自分は、簡単な思考の持ち主なんだと分かる。

——惺くんもこの星を見ているのかな？

ふと彼のことを思い出す。

漬物騒動ですっかり忘れていた。

明日もあの辺に惺くんはいるだろうか？でも、今日具合悪そうだったからお見舞いにでも行こっか？

そう考えてみるとだんだん楽しくなってきた。

あの真相も知りたい！！そして惺くんのこと……っつ？！

俺は掛け布団を頭の上から、かぶった。なぜか、自分の顔が赤くなった気がしたから。

あれ、どうしたんだろう？惺くんのことを考えたら、急に体が暑くなってきた……。

今度は掛け布団を蹴り落とした。

なんか変だ俺……。

このドキドキする正体が分からないまま、俺は眠りについた。
1日目終了。

* * *

ここはどこだろうか……。

目を開けた瞬間、俺は緑が沢山ある草むらの中にいた。
そこにもう一人、男の子の姿がある。

『カズ……』

俺は彼に向って「カズ」と呼んだ。

分からない……。なんでそう叫んだのか、俺自身分からない……。
カズ』

名前らしきものを呼んでいる俺だが、それが誰なのか分からない。
彼は後ろを向いていて、俺の方へ振り向こうとしない。

『カズッ』

どんどん彼は先に進んでしまう。どこへ行くんだろうかと、俺は
だんだん不安になってきた。

なんだろう？この気持ち。なんだろう？この怖さ。
そして――

なんだろう？この涙が出そうなぐらいの胸の痛み……。

とてつもなく大きな感情が、俺を支配する。

『苦しい……』

彼はどんどん森の中を進んでいくのに、俺は胸が苦しくて前に進
むことができない。

『行かないでえ……』

俺は彼に手を伸ばすが、俺を置いて行ってしまふ。

待って、待ってっ待ってっ！！

そう叫ぶが、彼は止まってくれない。

『俺も連れて行って……カズー！』

第6話「友達」

バサツッ!!

俺は飛び起きた。

「なんだ？あの夢？」

夢を見た。内容は何となくだが、覚えている。涙が出そうなくらい胸が苦しくて……。

何だよこの痛み……。

俺は優しく胸を抑えつけた。突然、俺の胸も苦しくなった。

これは夢じゃなくて現実。

「カズ」

俺がそう叫んでいた。でもカズって……俺のことじゃないのか？確か昨日、惺くんは俺のことをカズって呼んでいた。でも惺くんは俺のことを知っているはずがなくて……。

「もう訳わかんない」

朝起きたばかりの頭が、そんなに早く回転する筈もない。

とにかく今はご飯が先だ!!俺は急いで、台所に向かった。

朝食を食べた俺は、早速緑の世界に飛び込んだ。

惺くんを探しに行くために。

惺くんの家の地図を貰ったから、まずは惺君の家に行こうか。地図通りに進んでいくが、道らしい道がなく、ここがどこなのかがさっぱり分かりません……。

どうしましょう？さっそく迷子になった俺。

こうゆう時はイチかバチかで、大きな声を叫んでみようと思う。

誰かにこの声が届いて、きつと助けてくれる……と思ったが、やっぱり助けてくれないと思う。

どっちだよ!!

と突っ込みをしてもいいはずなのだが、他の人にはツッコミが鋭

いのに、やっぱり自分への突っ込みが甘いらしい。

「本当にどうすっかな……」

頭を掻きながら考えている瞬間。

ザックザック

何やらお宝を掘っているような音がする。

スコップが分らないけど、中を掘っているのは間違いない!!
ゆっくりとそこに近づいてみると

「ギャーーーーーーー」

「あぁっ」

このパターン前にもあった……様な気がする。

そこにはやはりというか、少年——惺くんがいた。

眼鏡をかけていて、片手に本を持っている。まさしく惺くん!!

「発見!!」

ついつい発見をしたので、惺くんに向かって指をさしてしまった。

「ええ?」

「ああ!」

「……」

気まずい雰囲気になって、俺達は口を閉じた。

何を話していいのか分からない。それは惺くんも同じなのだろう。

「ええっと、体大丈夫?」

なんとなくそのことを話題にすると、惺くんは気まずそうに俺から視線を逸らす。

「大丈夫ならそれでいいんだけど……」

「……」

沈黙。俺の住んでいるところでは、みんなお喋りで静かな人があまりいなかったから、こうゆう人にどうゆう対応をしているのか分からない。

「カズ……」

惺くんは呆然とその名前を呟いた。怖いけど昨日と同じ質問をした。

「カズって俺のことだよな？」

今度はキツク言い方にならないように、優しく問いかけた。

惺くんは、小さく頷く。

「なんで俺のことを知っているのか、聞かない方がいいのかな？」

その答えにも惺くんは頷く。理由は分からないけど、無理矢理聞くのもよくないだろうし……。

それに惺くんは子どもと話したことがないのだろう。

きつと惺くんは、同じぐらいの年のことにどう対応すればいいのかわからないだけだ。

今の俺と少しに似ている。そう思えば、惺くんと話しやすくなった。

「わかった、今はそれでもいいよ。今度言えるときがきたら言ってくれればいいから」

その言葉に、惺くんは優しく微笑んだ。とても嬉しそうに笑っている。

「じゃあ、惺くんのことなんて呼べばいい？何か俺だけカズって言うのな……」

惺くんは、ゆっくり考えてから俺の目を見て行った。

「カズが考えてくれ」

「ええ？うん……そうだな……」

惺くんがあまりに真剣に考えてくれていたから、すごい呼び名がつくのかと思っていたらその答えだったから少し驚いた。

話慣れてないから、一生懸命考えてくれたのかな？勝手に思ったんだけど、とても嬉しい。

その勢いでとてもいい呼び名が浮かんだ。

「うんつとね……。『サト』って言うのはどうかな？おれが『カズ』なら惺くんは『サト』何かいい感じじゃん」

自己満足かなと心配したが、それは杞憂に過ぎなかった。

「俺は『サト』で和幸は『カズ』。分かった」

俺のちゃんとした名前も知っているんだ。

「よろしくね。サト」

「よろしく。カズ」

俺達は友情の証として、ギュッと握手した。

サトは意外に力が強く、手を離れたときには俺の手が真っ赤になっていた。

第7話「またね。」

あの後、一旦昼食をとるために家に戻り、また此処に集合した。

「カズ、ちよつとこつちに来てほしい」

俺に手招きをする。

「ええ？何」

サトは俺を引っ張って何処かに連れて行こうとする。

「ちよつと来てっカズに見せたいものがあるんだ」

楽しそうなサトの姿を見ると、俺までもが楽しくなる。

「うっうん。わかった」

俺はサトに腕を引かれて歩いて行った。だんだん緑が濃くなる森の中を歩く。

クマとかでできそうで怖い。恐る恐るそのことを訊いてみることにした。

「クマとかでてこないよね？」

「出るよ」

サトは平然と答えた。

「ええーーーーー！！！」

「煩めづいっ」

「イタッ」

大声を出した俺の頭をこつんと叩いた。手加減してくれたのか、口で言ったほどあまり痛くない。

30分歩いただろうか？まだまだサトのいう場所には到着しない。

「サト、一体どこに行くの？」

「行つてのお楽しみ」

そんなに楽しい場所なのか？サトの喜んでいる姿を見るとそうだと思うのだが……。

それから10分歩く。

そこには……。

「うわぁ……綺麗……」

目の前に広がるのクローバー。一面クローバーだらけのクローバー畑。

「ここは俺の一番好きな場所なんだ」

「ええ？」

「この場所が一番落ち着くんだ」

確かにそうかもしれない。ここは俺とサトしかいない二人だけの緑の世界みたいだ。

……何か今、ものすごく恥ずかしいこと考えた？

その考えを捨てようとして首を振る。

「何？」

俺の不審な行動を見て、サトは怪訝な目を向ける。

「うつんっ。ちょっと疲れたなぁ……」と思って

「そう……」

数時間しかいないのにもう仲良くなった俺達。ここの人達とは、なぜか早く仲良くなれる。

それはもしかして、こここの空気が関係しているかもしれない。綺麗で澄んでいて……気持ちを穏やかにさせてくれる気がする。俺は大きく深呼吸した。

「綺麗な空気。都会とは全然違う……」

そう言うと、ふとサトは俺の目を覗き込んだ。

「カズが住んでいたところってどんなところ？」

「ええ？」

サトは悲しそうに笑う。

「俺、此処から出たことがないから、周りがどうなっているのか分からないんだ」

ええ……それって……。

「此処からって、この山奥からってこと？」

「うん……」

サトは下を向いた。

それは、それはどんなに寂しいことだろうか。

友達もいない。話す相手もない。そんな生活、俺だったら耐えられないと思う。

サトは俺が来る前までずっと独りでずっと……。

そう思っただけで、俺までもが辛くなって……。

「俺、あと3日はこっちにいるからさあつつ。一緒に遊ばない？」
サトを誘ってみた。

毎日遊んで、たくさんの思い出を作る？

都会では毎日のように友達との思い出ができる、俺もそうだった。
沢山の友達と遊んで、「また明日っ」て言って次の日も遊ぶ。

でも、サトは友達との思い出を作ったことがないんだよな。

またねって言うって、明日が楽しみになるこの気持ちもワクワクする気持ちもきつと知らない。

それを俺はサトにも味あわせたい。

あと2日しかないけど、何年分という大きなたくさんの思い出を作ろう。

「あつ暗くなってきた」

山奥だから日が沈むのが早い。空を見上げると、うつすら夕焼け色に染まっていた。

「帰ろっか？」

サトは躊躇いながらも頷いた。

まだ帰りたくないのか、顔を少し膨らませている。

そんなサトが可愛くて……。

「ほら、手。つなぐ？」

手を差し出すと、平然とサトは手を握った。俺達はゆっくりと歩いてきた道を戻る。

「ねえ？サトって年いくつ？」

今頃っていつたら今頃だが、サトの年を知らなかった。

「12。小学6年生」

「俺と同じ年なんだ」

他愛もない話をしながら、森の中を歩く。

サトの手はとても大きくて、とても温かい。優しく手を繋いでいてくれるのが分かる。

——まるで恋人みたいだなあ……。

と一瞬でも考えてしまった自分が少し恥ずかしい。

でも、優しく俺に接してくれるから、ついそんな雰囲気になってしまうのだ。

サトはとても優しい性格。たまに意地悪するけど、その行動がなぜか新鮮で……楽しい。

楽しい時間は速く感じるもの。いつの間にか着いていた。

「サト」

つないでいた手を離そうとするが、サトはギュツと痛い位握りしめてくる。

「大丈夫だよ、さっき言ったじゃん。また明日も遊ぼうね？」

寂しそくに手を離す。

「う……ん」

「またね。サトッ!」

手を振ると、ニコツと笑ってサトも言い返してくれた。

「またね。カズ」

ぶんぶんと頑張って手を振るサトの姿がとても初々しい。

俺達はずっと互いが見えなくなるまで、ずっと手を振っていた。

第8話「異変、遠い日の夢」

明日は何をしようかな……。

布団の上でゴロゴロしながら、明日のことを考えていた。

今日の夜は寝れそうもない。

いや、でも今日しっかり寝ないと明日も疲れるかもしれないな。

今日は結構、歩いたし……。

何か遠足気分だ。小学6年生になっても、眠れそうないものは眠れそうもない。

「ねえ、凌くん……」

どこからだろうか？母さんの声が聞こえた。

「何？美代子さん」

父さんの声も聞こえるということは、隣の両親の寝室からだろうか？壁が薄いから隣の部屋の声も聞こえるみたいだ。

「どうしよ……。昨日から和幸、……と仲良く毎日遊んでいるのよ？」

「どうしようと言われてもな。惺くんを此処から……しなければいいこと……ろ？」

言葉が途切れ途切れしか聞こえない。でも、俺とサトの話をしていと言うことは大体把握できた。

もっと話を聞きたいと思って、両親の寝室側の壁に耳をピタリとくっつけた。

今度はしっかりと言葉を鮮明に聞くことができた。

「そんなに心配なら、美代子さんが和幸に惺くんに会うなと言えばいいじゃないか」

ええ？

「言えないわよ。だって……、和幸があんなに楽しそうに笑っているの初めて見るのよ？今日なんてえ……幸せそのものっ！！て顔で帰ってきたじゃない……。つくう……そんな息子の笑顔を消す親どこにいるのよおっつ」

母さんは泣いているのか、つかえながら話している。

「でも、和幸自身も心配なんだろう？」

「……………」

母さんは無言だから、首を縦か横に振ったのだろう。

「今日はこの辺にしておこう。ここに来たのは義父さんのお墓参りが目的なんだから。俺に用事ができたからって言って早く変える方法ならある」

どうゆうことなのだろうか？

サトと俺が会ってはいけない？会わせないようにする？

母さんも父さんも何を言っているの？

疑問ばかりが頭に浮かぶ。

そういえば、前ばーちゃんがこんなこと言ってた気がする。

『本当はあの子を、この町から出してやりたいんだけどねえ……………』

それとこれは関係しているのかな？

もう少し両親の話を聞きたいと思ったが、今日は歩き疲れたため、俺に眠気が……………。

モヤモヤとした気分で、寝てしまった。

2日目終了。

* * *

『カーズー!!』

俺は彼に向ってカズと叫んでいる。遠い向こうにいる彼に手を振っているのだ。

クローバー畑の中を走って、彼のもとへ行った。

『カズっ遊ぼうよ』

息を弾ませて、彼を誘っている。

彼の表情は見えないが、コクコクと頷いているのが分かる。

『じゃあ何して遊ぼうつか？』

彼は楽しそうに、俺に手を差し出した。

だけど俺は、その手を取ることができなかった。自分から誘ったのに……。

落胆思想の俺に彼は小さな声で教え諭すようにゆっくりとゆっくりと話し始めた。

「今、君はちよつと俺を信じることができないんだよね？でも、初めてできた同い年の子供と遊びたい。いろいろな気持ちがちやまぜになってるから、怖がっているのかもね。でも大丈夫」

友達になったのに、彼の手を取るのが怖い。

——なんで？

そう問われたら答えることができない。だって自分自身も分からないんだから……。

でも、今確かのことはこの手を取ることが怖い、それだけだ。

彼が言っていることが正しいのかさえ分からないほど、俺は恐怖に怯えていた。

『大丈夫だよ。俺は約束を破らない』

彼は俺の耳元で囁いた。

なぜかその言葉は俺を安心させた。この手を取っても裏切らないと信じられる気がしたから。

躊躇いながらも手を取ると、彼はとても喜んだ。

『友達』

その言葉の響がとても綺麗でとても感動的だった。お礼というかなんというか嬉しかったので、俺は彼のためにクローバーの指輪を作った。

『ありがとう』

彼は恥ずかしそうにお礼を言った。

その笑顔がとても可愛くて……ずっと彼の笑顔を見ていたと思った。

第9話「遊ぼうっか？」

「サーーーートーーーー」

昨日と同じ場所に、分厚い本を読んでいるサトがいた。

「カズ。おはよう」

「サト。おはよう」

まだ会って一週間もたってない。それなのに親友の様に仲良くなっていた。

サトは読んでいる本を閉じて、俺に訊いてきた。

「じゃあ、何して遊ぼうか？」

「ええ？」

聞き覚えのある言葉に俺は、耳を疑った。

その言葉は昨日の夢で彼が言っていた言葉と真そっくりだ。

「どうかした？」

「ええ？ううんっ！何でもない。何して遊ぼうっかな？」

「カズの住んでいたところではどんな遊びをしていたの？」

俺ははっとした。

そうだった。サトは俺が初めての友達なんだ。大人数の遊びをしたことがないのかもしれない。というか多分ない。

「そうだなあ……例えば、キックベースとか野球とかサッカーとか……」

サトはどれも知らないらしく、首を傾げてる。

「ジャングルジムとか、テレビゲームとか」

ってここにモノがないとできないかつともっと簡単遊びを考えてみる。

「よくするっていったら、遊びというか分からないけどじゃんけんとか？」

「あっそれ知ってる！！」

「そっそう？」

俺はじゃんけんは日本中のだれもが知っている遊びだと思っていたけど、サトにとっては貴重な遊びなのかも知れない。

少しじゃんけんにやる気がでてきた。

「じゃあじゃんけんしよう!!」

「おおー!!」

「それでは行きます!!じゃんっけんっぽんっ!!」

「おお……勝ったっ」

目を見開いて、サトは自分の手をじっと見ている。

それほど嬉しかったのだろうか?

「何回かやったことあるけど、あんまり勝ったことなかったから少し嬉しい」

その言葉に安堵した。

「それじゃ、他の人とやったことがあるんだな」

「そうだよ。家族とかと遊んだこと位あるはず。俺は少し勘違いしていた。」

友達がいなかったでれとも遊んだことがないなんて……どうしてそんな風に転換してしまったのだろうか?

「じゃあ他に何か知ってる?この度はサトから遊びを教えて?」

「う……ん」

5分経過。

「あっち向いてホイ?」

「あっち向いてホイ……」

ああ……よく小さい頃やったな……。

まさかこの年になってやるとは思わなかったけど、サトが一生懸命考えてくれたんだから、やらないわけにいかない。

「ではまたまた始めますっ。じゃんけんぽん。あっち向いてホイ。じゃんけんぽん。あっち向いてホイ……」

10分経過。

「疲れました……」

あっち向いてホイでこんなに疲れたことはないです……連続10

分は結構きつい。

首が痛いし……声出し過ぎて喉が痛い……。

「どうする？まだ時間はあるけど？」

まだまだ元気なサトは、次の遊び、次の遊びと急かす。

「いったん休憩……つつ疲れたあ」

俺はそこに寝転がった。草が沢山あってふさふさしていて気持ちいい。

気持ちいい風が、優しく流れてくる。冷たすぎず、ふんわりと温かな風。俺に眠気を誘う。

うつとりして、つい寝てしまいそうだ。

里も俺の隣に寝転がった。

「カズ。あと何日こっちにいられるんだっけ？」

「あと2日。明日はおじいちゃんのお墓参りだから、あんまりサトの所にこれないと思うけど……」

「じゃあと一緒にいられるの最後の日だけ……かあ」
寂しい。

たった3日。実質的には昨日からだから2日しか一緒にいないのに、別れの時を考えるとこんなにも寂しい。

サトも俺と同じように思ってくれるのだろうか？

「サト、クローバー畑に行こう？」

突然、クローバー畑に行きたくなった。

——あの落ち着く、俺達だけの緑の世界に……。

第10話「傍にいたい」

「クローバー畑に行こう」

俺とサトは勢いよく飛びあがった。

「よし!!」

俺達は手をつなぐことが当たり前とばかりに、すんなりと手が合
わさった。恥ずかしそうに手を握って走り出した。

走りだすと言っても、スキップのように軽いもの。

緑の道を走っているとサトは、笑顔で声を弾ませながら言った。

「カズもクローバー畑に行きたかったんだ？実は俺も行きたかった」
サトも俺と同じことを考えていたんだ……。

そう思うと心がキューと締め付けられた。ばーちゃんの家に来て、
初めて夢を見たときと同じ胸の痛み。

「サトも？もしかしてこれが以心伝心っていうのかもしれない？」

「以心伝心？」

「うんっ！…心が通じ合うこと」

「うんっ」

ギュツとギュツと手に力を込めながら、クローバー畑へと走った。

「わぁーーーーーきれーい」

昨日もみたと言っのに、また同じ感動がよみがえる。

「うん。綺麗」

一面広がるクローバー。緑の世界。

今まで生きる中で一番ここが落ち着くと思う。と海にいた俺は家
にいてずっとゲームに没頭していた。

でもここはゲームもテレビもない。

あるのは、澄んでいる空気。透き通っている水。

そして、何処までも続いている緑。

都会にはないものばかりが此処にある。

「サト、寝転がらない？」

サトは頷いた。

クローバーが潰れないように、クローバーのないところに寝転がる。さつきも気持ちいいと思ったが、やっぱりここは違う。本当に静かだ。

一人でここにいたら少し怖い位、静かで……。

「ねえ？サトはこの世界から出てみたいとは思わない？」

「それはどうゆうこと？」

確かにこの世界は綺麗だ。緑がいつぱいで、気持ちよくて居心地がいい。

でも、この世界はあまりにも寂しすぎる。

純粹で綺麗すぎるこの世界にずっといるのは、とても窮屈だと思う。

前にも思ったが、ゲームもない世界にずっといるなんて俺には耐えられないし、友達がいないのも耐えられない。

サトだってこの生活が窮屈に感じることもあるはずだ。

だってじゃんけんをただでサト、あんなに喜んでいたんだよ？友達だってもっと欲しいと思うし……。

同じ年だからこそ、その辺の気持ちはよく分かっているつもりだ。

「他の所にも行ってみたいんじゃないかなと思ったんだ」

躊躇いながらも、サトは答えた。

「あるよ……。でも俺はここから出てはいけないんだ」

「どうゆうこと？」

「俺はここに一生いなければならない。そう小さい頃から言われているから」

それはどんな理由だろう？

一生ここにいなければいけない。サトをこの世界に閉じ込める気だろうか？

もっといろんなものを見た方がいいと、サトの親は思わないのか。

俺は不思議で不思議でたまらない。

「サトはこのままでいいの？」

サトは空を見上げながら、何かを考え込むように目を瞑った。

俺は声をかけず、じっとサトの答えを待った。サトの気持ちが聞きたかった。

サトはいつもいつも躊躇いながら答えてる。サトはあまり自分から俺のことを聞こうとしなかったから……。

あれ？もしかしたら、自分の気持ちをあまり他人に言ったことがないのかな？

サトの気持ちになつてみると、いろいろ見えてくる。

もしかして……と思うときは、いつもサトの気持ちを考えた時だ。

俺はまた、無理矢理サトのことを聞こうとしているのか……。自分では全然気付かなかった。

今、サトは困っているのかもしれない。

無理矢理俺が聞こうとしたせいで、頑張つて答えを探していくれるのだろうか。

——俺、一体何したいんだろう？

サトのことばかり聞いて、親密になるほど別れるのが辛くなると知っているのに、どうしてサトのことを知りたくなるんだろう。

サトに辛い思いさせてまで、なんで俺はサトのことが気になるんだろう？

初めての気持ちで戸惑い始めた俺。

でも、この気持ちがどこか懐かしい気持ちでもある気がしてならないのはなぜ？

「俺は………」

サトはゆっくりと口を開いた。

「俺が今思っているのは、ここを出たいと言うよりも、ずっとカズと傍にいたいってことだけだよ」

その切ない響きになぜか涙が出そうだった。

嬉しい気持ちもあるけど、それだけじゃない。絶望感を覚えたか

らだ。

俺達はあと2日で別れることになる。

きつと次会うと約束しても、俺がこっちに來れるのは何年後と遠い未來のことだ。きつとなんて「小さな約束」なんて忘れてる。

それでも、今の気持ちを答えてくれたサト。俺の気持ちも伝えようと思う。

「俺もサトとずっと傍にいたいよ？」

手の握っている力が強くなった。

「ああ!!」

恥ずかしそうにパツと手を離す。

そつえば俺達、クローバー畑に來る前からずつと手を繋いでいたままだつた。

ドキ…ドキツ…ドキツ!!

心臓の音が速くなっている。このドキドキは……。

「えつと……また手をつなぐ？」

俺は恥ずかしながら、サトを誘つた。

サトもその気配に気付いたのか、下を向きながらうんうんつと頷いた。

ギューつとギューつと力強く、握りあっている手は汗ばんでいるけど、気持ち悪いものではない。逆にそれがサトの汗だと思つと、変に恥ずかしくなっている。

きつと……俺の中にある気持ちは「あれ」なんだろう。

もうこのドキドキの正体が分かつてしまった。

——俺、サトのことが好きなんだな……

だから思つんだ。

ずつと、傍にいたいんだつて……

空を見上げながら横目でサトを見ると、サトも俺と同じように、

空を見上げながら横目で俺を見ていた。

サトも同じように想ってくれるのかな？

そんな期待を持ちながら、ずっと見つめ合っていた。

第11話「恋と悲しみの始まり」

「あれ？この祠、前にもあったっけ？」

クローバー畑からの帰り道。古そうな祠を見つけた。

昨日もさつきも通ったこの道に祠なんてあったかな？周りをしっかり見ていなかったから、気付かなかったただけか……。

サトは小さな声で話し始めた。

「……これは緑の神様って言うんだ」

「緑の神様？」

サトが詳しく説明してくれる。

「うん。この地区の神様。緑を守ってくれるんだって。その他にももう一人の神様を見守るためにここにいて聞いたことがある」

「もう一人の神様？」

「緑の神様だけじゃ、自然を守れないから、人間にも神様の称号を授けるんだって」

「へえーサトって詳しいね」

「ここにずっと住んでいるから。それぐらいわね」

サトはなぜか自嘲気味に笑った。もういつもの草むらに着いていたのだ。

「やだなあー帰りたくない」

俺が溜息交じりにそう呟く。これではまるで昨日とは立場が逆だ。
「俺だつて帰りたくない。カズといたいけど……明後日ちょっとだけ会えるから、それを楽しみに待つ」

サトが大人っぽく見えた。

「うんわかった」

つい拗ねたくなってしまった。そんな姿を見たサトは少し屈んで俺に背を合わせた。

「しょうがない」

「ええ？」

突然サトの顔が近付いてきた。

「ええ…ひやつつ」

奇声を上げてしまった。サトが俺のほっぺにキスしたからだ。
「なっとなにするん??サトオーー!!」

べしべしとサトの背中を叩く。

「カズってこうゆうの駄目な人?」

上目遣い見られたらドキューンとっ心臓が……心臓が……っ!!固
まりそうになりましたよおつ。

「サト!!」

怒るとサトは楽しそうに笑っていた。やっぱり^{サト}さだぁ……と、睨
んでも効力なし。

逆にもつと楽しそうに、それも”ニコニコ”と笑っている。

「じゃあまた。カズッ」

「うん。サト、またね」

昨日と同じように俺達は、互いが見えなくなるまで手を振った。
これは認めてしまっているのかな?

——俺達、恋人……?

言葉にしなくても伝わったのかな?だって、サトほっぺにキスし
てくれたし、俺の気持ちはバレていると思う……。

もし伝わっていなかったら、明後日伝えよう。きっと最後になる
だろうし……。

寂しい気持ちを抑えながら、俺は家への道を歩いた。

* * *

「明日、お父さんのお墓参りしたら帰りますっつ」

家に帰った途端、母さんの叫び声が俺の耳に入ってきた。

「どうしたの?母さん」

「ちよっちよっとな。美代子さん!!和幸帰ってきたよ」

父さんが必死に母さんを止めようとしている。

「ええつつ!!和幸?!」

俺の名前を聞いて瞬間、母さんは俺を見て凄い血相を変えて近づいてきた。

「和幸!!何もない?具合は悪くない??」

「う…うんつ。だつ大丈夫だけど……」

母さんの勢いに押されて、ちょっと控え目な感じになってしまった。俺の言葉に母さんは安堵し、雪崩のように崩れて行った。

「大丈夫、母さん……」

俺より自分こと心配した方がいいと思う……。

「母さん一体どうしたの?」って父さんに目を向けると、こっちにおいでと俺に手招きをする。

父さんの後をついて行く。一旦外に出て、家の裏に回った。

「ここは何?」

目の前に大きな蔵がある。

「これは生前、義父さんが建てた蔵だ。義父さんの大切なものがあるんだよ」

なぜおじいちゃんのこと、父さんは詳しいのだろう?義理の父なのに……しかも何年も会ってないはずなのに、どうして?

父さんは蔵の鍵を鍵穴に差し込む。古い鍵なのか、ギシギシと音を立てながら鍵を回している。

ガシャッ

どうやら開いたみたいだ。

「待ちなさい」

後ろからばーちゃんが、俺の腕を弱々しく掴んだ。

「ばーちゃん?」

さっきまでどこにもいなかったばーちゃんが、なんでここにいるのかな?

「凌さん。カズちゃんには、『あの事』伝えた?」

父さんはゆっくりと首を横に振る。

「いいえ、まだ伝えていません。まずはこれを見てもらってから言

いたいと思うのです」

「でもそんなことすれば、じーさんがやってきたことが泡になる。それでも凌さんはいいいですか？」

「いったい、一体何の話をしているの？」

俺には理解できない。

「義父さんには悪いと思います。でも今の状況を和幸に言つとかなければいけないと思うのです。これからも惺くんと関わると言うことなら……」

なんで、ここでサトの話になるんだろう？

不安そうに父さんの服の裾を握った。

それに気付いた父さんは、俺の頭を優しく撫でる。

「和幸、いいか。今からこの蔵を開ける。そこで何を見たか、父さんに教えてくれ。いいな」

真剣な目の父さん。漬物を無理やり押し付けてきた父さんの顔ではなく、とても重要なことをしようとしている、俺に何かを教えようとしている父親の顔。

「うん。分かった」

父さん扉に手を掛けてゆっくりと開ける。ギギギギと扉が音を立てる。

俺は扉の中を、じっと目を凝らしてみる。

蔵の中に見えたものは――？

第12話「俺とばーちゃんの恋の話」

「祠？真っ二つに割れた祠が見える」

俺は呆然と答えた。

この祠さつき見た祠と似てる気がする。暗い場所にあるからはつきり断言できない。

なぜこんな蔵の中に神様が祭る場所があるの？しかも、真っ二つになってるってことは罰が当たるんじゃないの？

ぞつと体に寒気がした。

「もう一回聞くぞ。その中には祠が見えるんだな？真っ二つの割れた？」

しつこい父さんに俺は大声で答えた。

「そう！！真っ二つに割れた祠が見えるって言うてるじゃん！！」

「分かった。ありがとう……。こうなったからには和幸にちゃんと話さないといけませんよね？義母さん……」

父さんは悲しそうにばーちゃんに呟いた。そしてばーちゃんも泣きそうな目で言った。

「そつだねえ、凌さん。後、美代子にちゃんとついてもらわないと

……」

「はい。私が美代子さんを説得します」

話がどんどん進んでいく。まるで俺だけが取り残されたかのよう

に……。どうゆうこと？父さんっばーちゃんっつ

俺は必至に父さんとばーちゃんに訊こうとする。

「ちよつと待ってくれ。この話は明日だ。美代子さんが落ち着いたら……。それまで待っていてくれ」

「父さん！？」

父さんは走って、俺から逃げてしまった。

「父さん……」

「大丈夫。凌さんはちょっと驚いているだけ。きっと明日には……」
「ばーちゃんは優しく笑ってくれた。俺を励ますように背中を擦ってくれた。」

「ばーちゃん。ありがとう」

「うんとばーちゃんは頷いた。」

「ご飯食べてお風呂はいつたら、今日はばーちゃんと寝てくれる？
ばーちゃん、いつも一人で寂しいもんでね」

「うん。分かった」

これはばーちゃんの愛情なんだ。意地悪するけど、こつゆうとき優しくしてくれるばーちゃん、俺はとても好きだ。

* * *

「ばーちゃんは、ずっとここに住んでいるの？」

布団に入りながら、俺からばーちゃんにいろいろ質問している。

「そうゆうことになるか……ずっとじーさんと一緒だから」

「じゃあ。幼馴染？」

「そう」

いつの間にかばーちゃんの恋バナになっていた。ばーちゃんの顔がうつすら赤くなっている様……気がする。

窓から星の光が俺達を照らしている。

「ばーちゃん、ここは星が綺麗だね。星たちがみんな輝いている……」

……

「そうだねえ……」

ばーちゃんは窓の星を見ながら、目を眇めた。

「ばーちゃん、はどうしてじーちゃんを好きになったの？」

「ええ？」

驚いたようにばーちゃんは目を見開く。

「なんとなく聞きたくなって……」

「カッコいいところかな？正義感が強くて、何事も負けないっていう勢いがあつたところ」

「じーちゃんって、凄かったんだね……」

「そうだよ、じーちゃんは凄かった」

「ばーちゃんはじーちゃんとの思い出を思い返しているのか、うつすらと涙を浮かべている。」

星の光りで、はつきりと涙が見えた。

「もしかしてカズちゃんは今、恋をしている？」

「ええっ！？」

布団に入っていた俺は、思わず布団を蹴り飛ばして起き上がった。しまった。

「しいーみんな、寝てる」

「ごめん、ばーちゃん」

俺はまた布団を元に戻して、寝る態勢に入った。

「……………」

さっきのばーちゃんの発言に答えるのが怖くて何も話すことができない。

「もし、カズちゃんが誰かを好きになったのなら、それは素敵なことだとばーちゃんは思うよ？」

「でも、もしそれが同性だったらばーちゃんはどうする？」

すんなり心配事を俺の口から言うことができた。

「ばーちゃんは経験豊富だから聞いてみたかった。困ってしまう質問でも、無理矢理にでも、聞いてみたかった。」

これは訊くことではないと分かっているけど、俺の中に困惑があったから、それを取り除いて欲しかった。

「カズちゃんが好きなのは、惺くん^{サト}だね？」

俺の気持ちはばーちゃんにバレバレだったみたい。恥ずかしいけどコクコクと頷いた。

「惺くんのどんな所がカズちゃんは好き？」

サトのどんな所が好き？

俺は頭の中を回転させる。

サトのどんな所が好き？

——それは、いつも本を読んでいる姿がかっこよくて、この辺のことが詳しくて……意地悪の所もあるけど、本当はとても優しい……。

寂しがりな所があつて、ほっとけなくなるし、初々しい所がとても可愛くて……。

考えだしたら止まらないほど、サトの好きなところはたくさんある。

そう話すと優しい笑みでばーちゃんは言った。

「私は性別なんて関係ないと思うけどね……」

その言葉が俺をどんなに安心させたのだろうか？

いつの間にか、安堵して俺は寝ていた。

『カズちゃんを、爺さんと同じ運命にはさせたくないから。だからごめんね……』

そんなばーちゃんの声を、夢の中で聞いた気がした。

3日目終了。

第13話「じーちゃんのお墓参り」

「う……うん！ー！はあ……よく寝たあゝ」

俺はグーっと手を伸ばした。朝はこれをしないと起きた気がしない。

「うん？あれ？」

隣にいるはずのばーちゃんがいない。どこに行ったのだろうか？俺は服に着替えて、台所に向かった。

「あつおはよう。和ちゃん」

「おはよう、ばーちゃん」

ばーちゃんは朝食の準備をしていた。

「起きるの早いね。いつも何時頃起きるの？」

「5時かな？」

「ええー！ー！ー！そんなに早いの？？」

「煩いわよっつ。和幸っ」

誰かが俺の頭を叩いた。後ろを振り向くと、不機嫌そうな母さんがいた。

「母さん……おはよう」

「おはよう、和幸。昨日はよく寝れた？」

「うん。良く寝れた……」

あれ？そういえば昨日は彼の夢を見なかったなあ……。だからかな？少しだけどゆったりと寝ることができた。

あの夢を見ると胸が苦しくなるから、よく寝れたとは思わなかった。ばーちゃんちにきて初めてよく寝れたかもしれない。

それはきつと、ばーちゃんのおかげだ。

「ばーちゃん！ー！俺、何か手伝うよ？何すればいい？」

「そこの漬物とって」

「……ええ？」

なんとなく、嫌な感じがする。もしかして、こんな日までも「

「漬物」なのか！？」

「漬物、じーちゃんの大好物だからねえ……」

「そうなんだ……」

「ばーちゃんは今でもじーちゃんのが好きなんだ。なんかいいなあ、そういうの。」

「なんというか「愛」って感じ、羨ましい。」

「はい。ばーちゃん、漬物」

「ありがとね」

そんな俺達のやり取りを見ていた母さんの一言。

「いつ、そんなに仲良くなったの？」

「さあ……いつでしょうね？」

俺とばーちゃんは、持ったえぶった笑みを母さんに見せた。

* * *

「おーい！お墓参り行くぞーい！」

どこから父さんが叫んでいる。

「はーい」

俺達は玄関の前に集まった。

「漬物は持ちましたか？義母さん」

「大丈夫だよ、凌さん」

「ばーちゃんは漬物を抱えて、父さんは水を、母さん花を、そして

俺は……？」

「俺は何も持たなくていいの？」

「いいよ。それで行きますよ」

お父さんを先頭に、歩きだした。亀ぐらい遅いんじゃないの？と思っぐらい遅く、ゆっくりとゆっくりと歩く。

「じーちゃんのお墓ってどこにあるんだろう？」

この辺、サトにいろいろ教えてもらって歩きまわったけど、お墓なんてものはなかった。

人口のものがほとんどなかったのに一体どこにあるのだろうか？
こんなにもゆっくり歩いていたら日は暮れないのかと心配になってきた。

お父さんは草むらの中を歩いて行く。その場所は昨日、サトと別れた場所であり、出会いの場所でもある。

この場所の先はクローバー畑でその先は行き止まりだったはず。クローバー畑に行く時の道にはお墓なんてなかった。

それだったら、じーちゃんのお墓は一体どこに？

俺は不信感を持ちながら歩いて行った。

父さんはなぜか右側を向きながら歩いている。母さんとはーちゃんは父さんの背中を見ながら歩いている。

「凌くん。このへん……かしら？」

「多分、この辺だと、思う……」

多分？

俺は父さんが言った言葉を疑った。

「父さんそれってどうゆうこと？」

「それが……」

もしかしてじーちゃんの墓の場所が分からないとか言うんじゃないよね……。

「俺達には、はっきりした義父さんの墓の場所が分からないんだ」
なぬうー……！！

俺は信じがたい目で父さんを見た。じゃあ俺達、一体どこに行こうとしていたんだよ？

「義父さんのお墓は、ある特定の人にしか分からないんだ。多分、昨日和幸がみた祠と同じもののある所が、義父さんの墓だと思うんだけど」

祠…… ってもしかして、サトとみた祠？

それだったらっつー！！

「蔵で見たのと同じか分からないけど、祠を見たよ。こっちっつ」
俺達は、祠の方へ向かった。

第13話「じーちゃんのお墓参り」(後書き)

次話、惺くんのごことが少し明らかに!!

第14話「サトの正体」

「ここっつ 此処だよ!!」

俺は祠があるところを指差す。

「ここ?」

三人とも実感しないのか、頭の上に疑問符が並んでいるのが見える。

「みつ見えないの?」

三人そうつてこくりと頷く。

「それだったら今までお墓参りはどうやっていったの?」

その前に、どうやってじーちゃんの骨埋めたんだよ?

怪訝な目を向けると、母さんは悲しそうに呟いた。

「覚えていないの」

その言葉に続けて、ばーちゃんも悲しそうに。

「緑の神様がすべて、その年のみんなの記憶を消してしまったから」

緑の神様って、サトが言っていたあの緑の神様? 記憶を消す?

「そんな現実離れた話、俺が信じると思う?」

「それでも私たちには祠は見えないの…。どこにあるのか祠を指してもらえる?」

「ここだよ」

祠を指差すと、母さんは祠に触ろうとする。

「ええ!?!」

俺は驚くべきものを見てしまった。

なんで…なんで…母さんの手が祠を貫通しているの?

今度は俺が触ってみると、ちゃんと祠に形があり、触れることもできる。

「分かった?」

俺は渋々、分かったと頷いた。

でもサトが言ってたことが正しいとすると。

「緑の神様って此処の緑を守るための神様なんだよね？記憶を消すなんてことできるの？」

「できるんだよ」

「ばーちゃんが重く口を開く。」

「爺さんは生前まで、緑の神様だったんだよ。それでその辺のことの記憶は爺さんは消して逝ったんだ」

「じーちゃんが緑の神様？」

今度は、ばーちゃんの代わりに父さんが話し始めた。

「緑の神様には「緑を守る」っていう使命を負わなければならないから、ここの町から出ることはできないんだ」

ええ？それって……。

どこか聞いたことがある言葉を耳にして、俺は固まってしまった。

まさかと思うのだが、まだ確証はない。父さんの話にしっかりと耳を傾ける。

「緑の神様はこの町を一生守っていかなくてはならない。ここの狭い世界で生きることしか許されないんだ。そして……」

その言葉は、俺の予想を確信に変えてしまう。

「今の緑の神様は、惺くん」

サトが今の緑の神様？

なんだか、頭が混乱しそうだ。

だけど、一つよく分かったことがある。

どうしてサトがこの町から出ようとしなかったのか……いや、出れなかったのか。

「惺くんはこの町から一生出れないんだよ。そして彼がこの町から出た瞬間、この町に闇が訪れる」

「闇？それってどんなもの？」

「よくは分からないけど……大変なことが起きるのは確かだよ」

父さんは明確なものは分からないと、その闇については多くは語

つてくれなかった。

でも、なんとなく分かった。語ってくれないと言うことは、それほど大変なことが起こると言うことだ。大きな災いが来ると言うこと……。

「分かった。じゃあサトは一生此処から出られないと……」

父さんは俺の目をしっかり見て、強く強くそうだと訴えてくる。

「……それだったら」

一階言葉を切って、大きく深呼吸する。

次の俺が言う言葉は、とても大きな決意だったから。

「……それだったら、俺がこの町に住む。こっちに引っ越してきて、サトと一緒にいる」

「何言ってるんだ!!」

「そうよっつ!! こんなところにいたら、和幸までもがっつ!!」

父さんと母さんは凄い勢いで怒声を出す。でもそんなのどうでもよかった。

ただ俺は、サトの傍にいたくて、サトに寂しい思いをさせたくない。

それはいけないことなの? そう目で訴えても両親の怒りは収まらなかった。

だけど、ばーちゃんは俺に反論せず、ただ俺達を見守っていてくれた。ニコツと笑って自分のしたいことをしなさい。そう語ってるような気がした。

「俺は、此処にサトを一人しておくことなんてできないっつ!!」

その言葉の意味を両親は覚ったのだろう。呆然とした目で俺を見ている。

「和幸。お前……」

——そう。俺はサトが好き……。

でもこの想いを今、両親に言うわけにはいかない。

だって、まだサトに伝えていない。その気持ちを本人以外伝えるまでは、言うわけにはいかない。

「父さん、母さん、ばーちゃん。そして、じーちゃん。サトの所に
行ってくるっ!!」

「ちよっちよっと、待ちなさい!!」

両親の声を聞かずに、俺は急いでサトの所へ向かった。

どこにいたかって？

そんなの分らないし、サトの家の場所なんて知らない。

唯一、俺に分かるのは、サトが行きそうな場所——『クローバ

ー畑』

そこにサトがいると願いながら、俺は走る。

第15話「四つ葉のクローバーの意味」

「サト？サトー！！」

俺はクローバー畑へ行く道で、好きな人の名前を叫びまくる。

「サトツツ」

「サトー……ツツ！！」

でも彼は返事をしてくれない。

サトは今どこにいるんだろう？

半日会っていないだけで、こんなにも切ない。半日愛しい人の名前を呼んでいないだけで、こんなにも苦しい。

サトは俺の中のとて大きな人物になっていた。

「サトー……！！」

どこにいるの？サト……。

走っている足を止めて、いったん休憩した。休憩している場合じゃない。もしかしたら父さんと母さんが追いかけてくるかもしれない。

それでも俺は足を止めた。

……走るのがこんなに辛いとは思わなかった。

いつもこの道を通るときには、サトがいて一緒に手をつないで歩いたり走ったり……。

毎回この道を通るのが楽しいと思っていたけど、この道が辛いと思ったことなんて一度もなくて。

サトと一緒にいた時間がとても、とても至福な時間だったんだと今、気付かされた。

またサトと手をつないで、ここを歩きたい。

サト……。

「はぁ……はぁ……つやつと着いたぁ……」

目的地であるクローバー畑に着いた。周りを見渡してみると、やはりそこにはクローバーしかなくて……。

「見当違い？」

今の自分の言葉にすごいショックを受けた。

折角ここまで来たのに……。

ザワツザワツ

草が揺れた音だろうか？でも少し不自然な音がした。前までのパターンで行けば、サトがいるはずだ。

そんな期待がどこかにある。

音がするところに、恐る恐る近づいてみる。

「サト？」

優しく彼の名前を呼ぶと。

「うん？カズ？」

サトは泥だらけになってクローバーの中にいた。

「どうしたのサト！？泥だらけじゃん！！」

「ええ？ああ……本当だ……」

自分が泥だけの姿に気付いたいなかったみたいだ。そんなサトの姿に俺は呆れる。

「何ポカーンと呟いてるの。早く着替えないとっつ」

「う……ん……分かってるんだけど、俺探し物がある」

「探し物って？」

「クローバー」

「クローバー？クローバーならココに沢山あるじゃん」

クローバーなら俺達の周りに沢山あるのに……どうしてそんなこと言っただろう？

首を傾げると、サトはそうじゃないと溜息をつく。

「クローバーと言っても三つ葉じゃなくて四つ葉のクローバー」

その言葉にも俺は首を傾げる。

「四つ葉のクローバー？だってサト、幸せになりたいわけじゃないって……」

前に言ってた。サトは「本当の自由が欲しい……」と。

今はその意味がよく分かったけど、俺はサトの願いを叶えられそ

うもない。

サトは片手に持っている本を開く。いつも片時も離さずに持っていたサトの本。

ページを数枚捲っただけで、目的のページを当てたらしい。

「見て」

クローバーの写真があつて半分以上は字がズラーッと書いてある。字が書いてあるちょうど真ん中らへんをサトが指さす。

「四つ葉のクローバーの意味？」

「そう。四つ葉のクローバーは幸せになるって言う意味だけじゃない」

俺は、サトの本を貸してもらつて読んでみた。

四つ葉のクローバーには一枚一枚の葉に意味があるらしい。

一枚はF a m e（名声）

一枚はW e a l t h（富）

一枚はH e a l t h（健康）

——そして、最後の一枚はF a i t h f u l L o v e r（満ち足りた愛）

「何か俺、四つ葉のクローバー欲しいかも」

サトの願いを叶えることはできないけど、小さな幸せがサトに訪れますように……。

四つ葉のクローバーを、サトにプレゼントしてあげたくなった。

「じゃあ、一緒に探そう？」

「う……んそうなんだけど……俺、昼飯持ってない……」

そうだった……。俺、あの祠からサトが会いたいために何も持たず、走ってきたんだった……。

困っていると、サトは大丈夫！！と笑った。サトは何やらカバンから出している。

「はいっ」

「ああ!!」

サトのカバンの中には、10個もおにぎりが入っている。
なんでこんなに大量のおにぎりが入っているのかと訊くと、サトは恥ずかしそうに俺から視線を逸らす。

「なんとなくだけど、カズが来るような気がして……」

「サト……」

「カズ、これが以心伝心？」

——俺は、四つ葉のクローバーがなくても、とても幸せです…。
…。

第15話「四つ葉のクローバーの意味」(後書き)

とうとう来てしまった5日目。

今日終わるかは……ちよつと絶望的ですが、時間がある限り投稿したいと思います。

第16話「サトの手作りおにぎり」

「サト。これ、もしかして手作り？」

「そうだけど……」

下を向きながら、おにぎりを渡してくれた。

サトの手作りだと思うと、おにぎりを持つ手が震えた。

「カズ。食べないの？」

なかなか食べない俺を見て、サトは少ししょんぼりとした顔を見せた。

一体どうしてそんな顔をするのかな？とサトを見ていると、サトの目が俺の持っているのおにぎりに目が言ってることに気付いた。
早く食べてくれないのが嫌なのかな？

「だって、せつかくのサトの手作りだよ？何かもったいない感じがして……」

その言葉に安心したのかサトは嬉しそう。

「大丈夫。まだいっぱいあるから……」

サトは沢山のおにぎりを俺の前に出してくれる。

「そうだね。いただきまーす」

「どうぞ」

おにぎりを食べようとするのだが、とても鋭いサトの視線があつてどうも食べにくい。

どうしたんだ？サト。

じーっと怖い顔で、俺を見ている。

「なっ何？」

「ええっとお……早く食べて感想聞かせて？」

「あっうん。分かった」

どうやら感想を待っていたようだ。

ササッとおにぎりを食べようとしたら、一口で口の中に入ってしまつて……

「ぐほっ!!!」

「えっ何？不味い？不味かった？？」

サトは血相を変えて俺の顔を覗き込む。俺は違う意味で血相を変えた。

「むふっつ!!」

「えっっ？何？不味い？」

俺は違うと、必死に首を振る。

「みずっつ」

「えっ水？」

そう。俺は喉におにぎりを詰まらせたのだ。急いで、サトはカバンの中にある水筒をだし、水を飲ませてくれた。

「はぁ~~~~。生き返った…ぐほっ」

いきなり空気を吸ったから、勢いよく空気が肺に回ったのだろう。咳こんだ。

「大丈夫？そんなに一気に食べたら、詰まらせて当たり前……」

優しく背中を撫でてくれる。

「うう…ありがとう。サト」

「うん。どういたしまして」

サトがにつこりと笑っている。

その笑みに俺は悪寒を感じた。なぜか、今のサトの笑みが悪魔の笑みに見えたのは……やはり気のせいではなかった。

「俺、もうお腹いっぱいだから、あと全部食べて……」

ドサツツドサツツ

俺の目の前には、推定30個以上のおにぎりが……。

あれ……？さっきまでは、たしか…確か…いや絶対っつ10個しかなかった。なのに、なんでっつ!!!

こんなに食べられそうもない大量のおにぎりがあるんですかつつ!!!

「実は……カズのおばあちゃんにいったい漬物貰ったんだ。だから作り過ぎて」

さつきは喉に詰まらせて、味は分からなかったが。
もしかすると……もしかしくても。

「全部、漬物のおにぎり？」

「違うよ」

違うんかーいっつ。

今ので何かどつと疲れた気がするのですが、気のせいなのでしょう
うか？

「半分は、山菜が入ってる」

「山菜？」

「俺がとってきた山菜。初めて味付けしたから心配でさ……」

「そっか……」

俺のために作れってくれたと思うと嬉しい……。

ジーンとしていると、サトは少し変わったことを言い始めた。

「だから初めて繋がりで、俺がカズに食べさせてあげる」

「……ええ？」

ちよつと話の方向が違う。ちよつとどころじゃない、激しく違う。

「はい。あーんして」

小さい子に食べさせるように、俺の口元におにぎりを持ってくる。
ええっちよつ、ちよつと待ってえっ！！

「あ……ん？」

口を大きく開ける。サトのがゆっくりと俺の口の中におにぎりを
入れる。

緊張して、なかなかおにぎりに噛むことができずに、固まってし
まう。そんな俺を見てサトは、頭を撫でてくれた。

「はい、よくできました」

「……………」

ものすごく恥ずかしい……。あゝんなんで、何年振りだろうか……

……？

今サトの顔が見れない。

こうゆうの恋人としかしないんじゃないのかな？勝手にそう想像

して、俺だけ心の中で盛り上がっている。

俺的に「恋人」という響が綺麗で好きだ。

「早く食べてクローバーを探しに行こう?.....頑張ってカズ。おにぎり食べてっ」

上目遣いに俺を見上げるサトの目は可愛くて.....。

幸せなんだけど.....幸せなんだけど.....やっぱり幸せですっ。

でも、そんなに幸せの時間は
長く続かない。

心のどこかで、
俺は気付いていた.....。

第17話「幸せな時間」

「カズー？クローバーあった？」
「ないー」

探し始めて2時間。一向に四つ葉のクローバーは見つからない。簡単に見つかるものだとは思っていなかったけど、こんなにクローバーがあれば一つぐらい見つかると思ってた。

「サトはクローバー探して結構しているの？」

「うん……1年前の今頃からしてるんだけど、一回も見つかったことがないんだ」

「一年も……？」

サトは自嘲気味に笑った。

「こんなを探して見つからないなら、四つ葉のクローバーなんてないかもしれない」

弱気になっているサト。

「大丈夫だよ、言っただろ？絶対クローバーを見つけるっていったら、絶対見つけるんだ」

そして……クローバーを見つけた時の、サトの笑顔が見たいよ？

「そうだね……ありがとう。カズ」

「よしっ頑張りますか！！」

また俺達は四つ葉のクローバーを探し始めた。

泥だらけになってもいい。ただただ、クローバーを探すのに必死だった。

サトは1年間探しているって言ってた。だけど、あと俺とサトだけでいられる時間はあまりない。

『ここに引っ越してきたい。ずっとサトと一緒にいたい』

家族にはそう言った。それは俺の本心だ。

でもそれが叶わないことは知っている。父さんも母さんも無理矢理、俺を帰らせようとする。

——なんで俺はこんなにも小さいことしかできないんだろう。

サトの願いも、自分の願いさえも叶えることができない。

ただ、今俺ができるのは四つばのクローバーを見つけて、サトを喜ばすこと。サトとの思い出をたくさん作ることだけだ。

あと少しでサトと会えなくなる。

そう考えたら……。

「カズ？どうしたの？」

心配そうにサトは俺の顔を覗きこんだ。

涙が落ちませんように……。

「大丈夫つつ。ちよつとボーっとしてただけ……っええ？サト？」

突然、サトが俺を抱きしめた。

何……？

体から力一瞬にして抜けた。体が軽くなるのを感じる。

「サト？」

「カズ……。もしかして叔父さんとかから俺のこと聞いた？」

ドキンッッ。

俺の体が大きく跳ねた。その反応でサトは悟ったのだろう。

「やっぱりそうなんだ……」

ゆっくりと俺の体を離す。

「そうだよね……。そうじゃなければ、こんなに必死にクローバー

探し手伝ってくれないよね……」

今にも泣きそうなサトの顔があった。

違う、違うっ違うっ！！

そう言いたいのに、嗚咽をこらえようとして言葉が、声が出ない。

「もう、大丈夫。俺一人で探す。ごめん、無理矢理こんなことさせて」

そんなこと思ってないっつ。

「泥だけになつたら両親に怒られるよね……本当にごめん」

「違うっ……！」

やっつとやっつと言葉が出た。

「違うつ。俺……俺……」

自分の気持ちを言ってしまいたい。伝えたいそう思つのに、声が震えて上手く表現できない。

「無理しないでいいよ。言いたいことは分かった。もう嫌だつてことでしょ？俺と会いたくないってことでしょ！？」

どうしてそんな話になつてしまったの？

「違うつてば。ただ俺は、サトにクローバーをプレゼントしたいと思つたからクローバーを探してるんだよ？なのはどうしてサトと会いたくないって話になつてるの？そんなこと言うならサトが俺と会いたくないって思つてるんじゃないの？！」

疑いたくないことを疑つて……俺、本当に何やつてるんだろつ。

本当に訳わからない。

俺は何してるの？違うつ……。

俺は何がしたいの？

「はあ……はあ……」

大声を出して疲れた。サトは混乱しているのか俺に訊いてくる。

「分かんないよ？何だろうこれ？」

「俺だつて分かんないよ！！」

なんでそんな風に考えてしまったのか……。

「俺……なんでカズに喧嘩売ってるんだろ？」

冷静を取り戻したのか、サトは頭を抱えた。

「ごめん……カズ。俺、何か知らないけど熱くなつて……。ごめんつ！！お願いだから嫌いにならないで？」

またサトは俺を抱きしめた。さっきの抱擁とは違つ。

サトの手は震えていて、小さな子のようにギュッとギュッと力強く抱きしめてくる。

「嫌いになるわけない。大丈夫。俺は約束を破らない」

「うん……」

サトは約束を破らないと言う言葉に弱い。

「カズ……好きだよ？」

「うん。俺も好きだよ……」

初めて俺達は気持ちを言葉にした。

サトに負けないくらい強く抱きしめた。こうしてみると、やっぱりサトの方が背が大きいんだと、実感した。

いつの間にかサトは甘えるようになったんだっけ？

最初は不器用で……今でも不器用だけどね。

自分たちの気持ちは通じあっていることは知っていたけど、あえてその気持ちを口にしていなかった。

きつと別れが寂しくなるからと……。

もう俺達は限界だったんだ。この気持ちは最初はとても小さいなものだったけど……今はそれ以上に俺達の気持ちは大きい。

一緒にいる時間が多かったから、気持ちまでもが抑えられないくらい大きくなりすぎてしまった。

気付いてしまったら、言ってしまったら、止まらない。

「あっ！ちょっと、カズつつあれ見て？」

サトの指さす方には、俺達が探し続けたきたものがあつた。

「四つ葉のクローバー！？」

急いで近づいてみると、四つ葉のクローバーが。

「やっぱり四つ葉だよな？」

サトの質問に、俺は大きく頷く。

「数えてみる……一枚、二枚、三枚、四枚！！おおーあつた四枚あつた！！」

「あつた。うわぁ……凄い初めて見た……」

「やったよ。カズ」

「うん、やったよ。サトおー」

俺も初めて見た……四つ葉のクローバー。

——サトに少しでも幸せを運んできて下さい。
と幸運のクローバーに祈る。

「カズ……あれ……」

サトは呆然と、四つ葉のクローバーの隣を指す。
指差した先を見ると、そこには四つの葉の。

「ええ……もしかして？」

「これも四つ葉のクローバー??」

こんな偶然って中々ないと思う。もう一つ、四つ葉のクローバー
を見つけた。しかも四つ葉のクローバーの隣に四つ葉のクローバー。
俺は息をのんだ。

「凄くない？」

「うん、凄い」

うわぁ……どうしよう凄く嬉しい。こんなに感動することなんて
滅多にない。

サトも感動しているのか、頬が緩んでいる。

「何かあれだよな……」

サトが呟く。

「うん？」

「何か、このクローバー達。俺たちみたい」

その言葉はとても胸に響く言葉だった。サトが言ったから、余計
に俺の中に通って行く。

俺の頬もサトみたいに緩んだ。

「うん……そうだね」

二人は自然に目を合せ、そして手をつないだ……。

クローバーは偉大だ。俺達に幸せをくれる。たとえ、ずっと続く
幸せではないとしても。

このクローバー達みたいに、俺達は幸せになれないの分かっ
てい
るよ。

でも、今だけ。今だけでいいから、

——クローバー達の幸せの力を分けて下さい。

四つ葉のクローバーを見つけたこと。
俺は一生の思い出にする。

第18話「本当の気持ち」

風邪が緩やかに吹く。

まるで俺達を包み込むように……。

「緑の神様って知ってる？」

クローバー畑に寝転びながら、サトは独り言のように呟いた。

「知ってる。母さんも父さんもばーちゃんも話してくれた」

「そう……」

握っていた手の力が緩んだような気がする。

「ごめんサト。この前俺の無神経なこと言った。本当にごめん……」
無神経なこと——「この町から出たいか」と聞いたことだ。

サトは一生、此処から出ることはできない。俺がした質問は、サトにとつてとても残酷なものだった。

………それなのに、サトは何もないかのように笑っている。
ねえ、どうして？

なんで、サトは辛そうなのに笑っているの？

分かっている、そんなの聞かなくても分かっている……。

俺に心配させないようにつて、無理して笑ってるんだよね。

けど……俺はサトにそんな顔させたくないよ？

言ってほしいんだ。伝えてほしいんだ。

辛いつて、一人は寂しいつて、俺に聞かせてほしい……。

「サト。無理しなくていいから……言いたいことがあったら、言っ
て……」

きっとこれが最後だから、サトの小さな願いをかなえる最後の時
間だから。

「何もない……カズが俺のためにクローバーを探してくれたと思った
だけで嬉しい」

「………」

駄目か……。

どうしても、サトはその気持ちを伝えようとしな……。

なんで、なんで……っつ。

「俺に話にくい？」

「違う」

サトは優しく、俺を拒絶する。辛いことがあっても、俺には言ってくれない。でも、俺に優しく接してくれる。

それが俺にとって一番苦しいってこと、サトは知っている？

「もういいよ。サト……」

ゆつくりとサトの手を離し、起き上がる。

「ええ？どうしたのカズ？」

俺の言葉の意味が分からないのか、ぽけーと顔をしている。

「……………」

「どうしたの？カズ……」

不安そうな声で俺を呼んでいる…………。

じゃあその不安そうなことを口に出して言ってくればいいじゃんっつ。

俺は思い切ってサトに言った。

「言つてよ。サトが辛いこと言つてよお…………っつ。さっきから顔引きつつてるの分かつてるんだからっつ……！」

「ちがつ……………」

その言葉に反論しようと、サトも起き上がる。だけど、俺はサトの言葉を遮ってまでも話し続ける。

「なんで…無理矢理笑おうとするの？さっきにみたいに喧嘩売ってくる勢いでもいいから何でもいいから、言いたいことがあるなら話してよっつ。サトのこと全然役に立っていないってこと、分かっただけ……………」

俺はなんだか罪悪感に襲われた。

今にも泣きそうな目で、サトが俺を見つめている。それだっただけ…………。

それだっただけっつそ泣いてしまえ。

泣いて泣いて、サトが悩んでいること、苦しいこと、辛いこと、何でも流してくれればいいのに……。

「カズ……ありがとう」

「ええ？」

とても静かな、どこかとても優しい響きでサトは俺にお礼を言った。

「怒ってくれてありがとう、何か……嬉しいっ」

無理に笑って笑顔じゃなくて、本当の笑顔で俺に言ってくれた。

「べつ別に……大したことは言っていないし……。それでも俺はサトが少しでも幸せにはなってほしいとも思っただけだよ」

恥ずかしくなって照れ隠しをしそうになったが、自分の本当の気持ちサトに言えて本当に良かったと思ってる。

「カズ……ちよつと話長くなるけど、聞いてもらっていい？」

強い眼差し。だけど、どことなく淋しそうな弱々しい表情。

声を出さず、黙って俺は頷いた。

風が、少しひんやりとした風が、また俺達を包む。

「……俺が緑の神様の存在を知ったのは、1年半前のこと」

サトはぼつぼつと話し始めた。

「俺が緑の神様と知ったのもそのことだった。緑の神様はこの町を守る唯一の神様。何でもできる力をもらった自由のお方なんだって教えられた」

「だけど」とサトは続ける。

「何でもできるって？どこに自由がある？俺は疑問を持った。だって力を使うことはあまりできないし、この町から出れないことが何処が自由だって……」

黙って俺は話を聞いていた。サトは自分の気持ちを隠さず、話している。

自分を出そうとしている。

「俺だって此処から出たい。違う世界に行ってみたい。カズと同じ世界に行ってみたい……なのに、どうして、俺はそれが許されない

「んだらうって…」

辛そうに下を向いている。

無理矢理言わせたのがよくなかったのか。

俺はもしかしてただの自己満足でサトにいろんなものを吐き出させようとしていたのだろうか？

サトの表情を見るとそう思えてきて……サトを抱きしめた。

「ごめん」

「何でカズ謝るの？」

不思議そうにサトは俺の顔を見る。

「何か無理矢理、言わせたのかなあ……。ちよつと反省中」

「そんなことない、嬉しかった。俺のために、必至になってくれた」

「そ…そう」

どうやらサトを傷つけていなかったらしい。それにホッとする。

「ねえ？カズ。また俺と会ってくれる？此処に来てくれる？」

「……」

答えられなかった。

会いたい……

でも、親がどういうか……。

俺はさっきサトにが会いたいために、勝手にじーちゃんのお墓参りを放棄して。

サトは俺の異変に気付いたのか、心配そうに俺の顔を見つめてくる。

「そうだね…また会えるといいよね」

サトにばかり本音を言えつと言ってるのに、俺は言わなかった……言えなかった。

楽しそうなサトの笑顔を見られなくなると思うと怖くって。時間はあとほんの少ししかない。

ただ、今はサトの楽しそうな笑顔が見たかった。

サトはそつと俺の手を両手で包みこむ。

「大丈夫。カズがこれなくても俺がカズに会いに行く…」

「ええ？ははは。頼もしい」

一瞬、サトの顔がキリッと真剣になったから、本気で言ったのか
と思ったけど、すぐに笑ったから冗談だと分かった。

笑いながらクローバー畑で、俺達だけの緑の世界で話をしていた。

——別れの時間は、もうそこまで迫^{せま}っていた。

第19話「バイバイ」

「何か寂しいね」

俺達はクローバー畑を出て、緑の道をゆっくりとゆっくりと歩いていった。

「うん……」

寂しい。

その言葉に頷いたけど、寂しいと言う言葉だけでは表し切れないほど、俺の中にポカンと何を失ったように、穴が開いた。

もうこのまま会えなくなる……。

出会いには終わりがあると分かっていたはずなのに……どうしてこんなにも深い恋にはまってしまったのだろう。

「サト……」

「何？カズ」

「なんでカズって呼ぶの？家族でも今はばーちゃんぐらいしか呼ばないのに……」

ずっと聞きたかった。

どうしてサトは俺のことを知っている？

「……カズが覚えてないからだよ」

前にも言っていた。

もしかして俺。昔にこの町に来ているのか？

小さい頃の記憶だったら覚えていないかもしれない。母さんと父さんはおばあちゃんの家行く時、俺が行くの前初めてって伝えただけ、それが嘘の可能性だってある。

「俺はこの町に一回来ているの？」

なんとも情けない質問だと思ったけど、覚えていないらしい俺の記憶をたどってみてもやっぱり思いだせない。

訊く術しか残されていなかった。

「どうだろうね」

曖昧な返事。

「そう……」

何だかだんだん俺とサトの間に距離ができた感じがする。四つ葉のクローバーの幸せの力はもう消えてしまったのだろうか？

あんなに一生懸命に探したのに……。

「カズ。好きだよ？」

突然のサトからの告白。思いつきり、俺はきょとんとしてしまった。

「何その顔。カズらしくない」

「サトって拗ねるんだ」

頬を少しだけ膨らませるのが分かって、クスって笑ってしまう。

「カズちよつと止まって」

歩いている足を止めた。

何をするのかなとボーっとしていると、いきなりサトが俺の目線に合わせるように屈んだ。

思いつきりサトの顔が近付いたのでドキドキしてしまう。

「ちよつと横向いて」

言われるまま横を向くと、サトは俺の顎を持つ。

何をするのかと横目でサトを見ると、

「ぎやつつ！ちよつちよちよつとサトお！？なにっ？ちよつとくすぐりたい、ひゃっ」

サトは俺の耳の中に、息を吹き込む。

しかも、何秒経っても何分も経っても、ずっと俺の耳の中に息を吹き込み続けている。

ドキドキつと心臓の音が高鳴っている。

「サト。ギブツギブアップツ。もう無理っ」

俺は無理矢理サトは引き剥がしてしまった。

心臓がドキドキすぎて、壊れるかもしれないと思ったぐらい、俺が限界が来ていた。

ちよつと驚いていたサトだが、俺を見た後すぐに下を向いた。そしてぼそつと呟いた。

「ごめん。カズでも、これが最後だから……これが『最後の望み』だから」

「ええ？」

サトはちよつと眉を下げて、困ったような顔をしている。

「分かってるよ。カズ。これが最後だって分かってる」

知っていた……カズが？

「ちよつとしてみたかった。最後だってカズの顔に書いてあったから……だから、もうカズに会えないんだなあ……」って」

顔をあげるけど、俺と視線を逸らしたまま独り言のように話しているサト。

「ごめん。嘘ついて、サトにばかり本音言わせてたのに……」

罪悪感が込み上げてきた。

「大丈夫って言うてる。カズは俺のことを考えてくれたのちゃんと分かってるよ」

不意にサトは俺を抱きしめる。ギューって言うより、優しくふわっとするように抱きしめてくれる。

その優しさに涙が出そうになった。俺も優しくサトを抱きしめる。サトの優しさをもう、俺は受け取ることができない。

「カズ、もしかして小母さんおはと小父さんおじの反対を押し切ってここに来てくれた？」

「どうしてそのこと……？」

あつっと思つたときはもう後の祭り。サトは自嘲気味に笑う。

「やっぱりかあ……小母さんは俺のことを怖がってるからね。俺の存在を……」

「どうしてサトが緑の神様なんだろう？他の人じゃ駄目だったのかな？」

ついそんなことを言ってしまった。

あまりにサトをこの世界に縛るから、緑の神様が憎く思える。

「緑の神様は他の人だつてよかったんだ。……ただそのとき、緑の神様になる人が俺しかいなかっただけ」

「また会いたい。俺、今度ここに一人で遊びに来る」

「そうだ!!」

自分でも驚いた。どうしてそのことが思いつかなかったんだつて。「そうだよっ!!」俺一人でサトに会いに来ればいいっつ。夏休みとか冬休みとか大型連休しかこれないけど、それだったらサトとまた一緒に……」

俺の弾む声を消し去るように、サトは冷たい声を出した。

「それはできない」

「ええ? どうして?」

サトからそんなことを言われるとは思わなくて、固まってしまった。

「また、君は俺を忘れてしまうから……」

他人行儀な呼ばれ方をされたのがショックだったのか、それとも忘れてしまうと言う言葉にショックだったのか、もう分からない。

「やっぱり俺はここに来たことがあるの? そしてサトにあったことがあるの?」

さっきの同じ質問をするが、今度はサトに何も答えずただ俺の視線が耐えられないと逸らしてしまう。

俺は何を忘れてしまったのか? サトとの記憶がない……でもサトは俺との記憶があるってことで……。

思い出そうとするがやっぱり分からない。

「いいよ、カズ。無理矢理思い出さなくて。俺が力不足だったのがいけなかったんだ」

「ねえ、どうゆうこと。サト? 教えてよっつどうゆうこと? ねえ、サトっつ」

俺は、抱きしめていた手を離し、サトの肩をつかむ。サトは俺よ

りも身長が大きいから、俺が上を向く形になる。

「ごめん、カズ。バイバイ」

そつとサトの手が俺から離れる。

「カズ、バイバイ」

「嫌だよ…サト。何言ってるの？」

その言葉を否定してもらいたくて、俺は掴んでいた肩に力を入れる。だけどサトは俺の腕を払った。

「バイバイ」

「嫌だ」

「バイバイ」

「嫌だっつ」

「バイバイ」

嫌がらせ？違うつて分かっているけど、俺の中にその言葉は嫌に響いて、頭の中で連呼する。

「カズ……。ごめんね」

サトは一步、俺から遠ざかる。

「バイバイ、カズっ」

手を振って、サトは俺から遠ざかっていく。サトは前を向いて、俺から顔を背けた。

俺はサトは追いかけようとするが、足が前に動かない。

「サトおおおっつ」

大きな声で叫んでも、サトは消して振り返ろうとはしてくれなかった。

ねえ……サト。

どうしてバイバイなの？またね……じゃないの？

一人でどうやってでもサトの元に帰ろうと思ったのに…、サトは俺がまた此処に来ることを望んでいなかった。

『バイバイ』

その言葉は俺達の別れ。また会うことのない別れを意味していた。

第20話「サトとカズ」

いつまでそこに立っていただろう……。

足が動くようになっていたのに気付いたのは、サトが見えなくなつて何分も経つてからだ。

「サト……………」

俺が呼んでも、サトは返事をしてくれない。

この恋は終わってしまったのか。それを信じたくないだけなのか。それ以前に恋は始まっていたのか……。

混乱してくる俺はもう考えられなくなっていた。

とぼとぼとした足取りでばーちゃんの家を目指した。

* * *

「お帰り。和ちゃん」

迎えてくれたのはばーちゃんだった。

「ごめんなさい。じーちゃんのお墓参りしなくて……………」

俺は深々と頭を下げた。これだけでも謝りきれない。それなのに……………。

「謝らないで、和ちゃん。ばーちゃんもじーちゃんも怒ってないよ」

「そんなはずないっつ。怒ってるはず、いいよ、ばーちゃん。怒ってくれて」

ばーちゃんは首を横に振る。

「怒らないよ。ばーちゃん、すごい和ちゃんの気持ち分かる」

「ばーちゃん……………」

「まずはお風呂へ入っておいで。美代子も凌さんも心配していたよ」

「ええ？母さんと父さんが？」

そんなはずがない。だって母さんも父さんもあんなに怒っていた……………。

「そつだよ。心配していた……」

「……………」

そう言われても今両親に会う勇氣は俺にはなく……ばーちゃんの言われた通り、お風呂に入ることにした。

お風呂に入っている間、ずっとサトのことを考えていた。

今何してるのかなあって。ちゃんとご飯食べてるのかなあって。

もう会えることはないと思って、サトのことが気になって仕方なかった。

「ばーちゃん。風呂出たよー」

風呂を出て、髪をタオルで乾かしていた。

「わかった。それ終わってからでいいから、ばーちゃんの部屋においで」

「えっ？うん」

直に俺から顔を逸らし、ササツと部屋に戻ってしまった。

ばーちゃんの顔がとても神妙に見えたので、一瞬引いてしまった。とても大切な話をするのだと、顔で語っていた気がする。

何の話だろう？

やっぱりサトのこと……？

怒っていないって言ってたから、説教ではないと思うんだけど……。

浮かない気分で、俺は髪を乾かしていた。

「ばーちゃん」

ばーちゃんの部屋のお座敷の襖をコンコンと叩いて、入った。

「よく来たね。和ちゃん」

その台詞は、ばーちゃんの家に来た時に言う台詞だと思うのは俺だけだろうか？

「うん。で、何？ばーちゃん」

「ちよつとそこに座って」

ばーちゃんが出てくれた座布団にゆっくりと座る。座布団だと

怒られてくれわけじゃないけど。自然と正座をしてしまう。

緊張しているのかばーちゃんは大きく深呼吸をしてから話し始めた。

「和ちゃん。今から話すことは、全部本当のことだからしっかりと聞きなさい。いいね？」

「ばーちゃんらしくない口調。今からする話がとても重要なことだと思ひ知る。」

俺は声を出さず、ばーちゃんの顔を見ながら大きく頷いた。

「惺くんが、緑の神様ということは言つたね。そして緑の神様となつた人間はこの町から出ることを許されない。ということも……」

「うん」

それに嘘はない。真剣にばーちゃんの話を書く。

「だけど、緑の神様が此処から出られない理由は、まだあるんだよ」
次くる言葉はとても衝撃的で、俺は目を瞠つた。

「緑の神様となつた人間がこの町を出た瞬間。その人間自身も死んでしまふんだよ」

じゃあ、サトはこの町から出たら死んでしまふていうこと……？

この町の自然が崩れるだけではなく、サトまでもが？

俺の全身がとても冷たいもので覆われたようだ。

「でも、それが一番の話題じゃない」

その言葉の方が衝撃的だったかもしれない。

それ以上にどんな衝撃なことがあるのかと。サトはこの世界で、この狭い窮屈な世界で苦しんでいると言つのに、それ以上に何があるのだと言つのか……。

俺には不思議で不思議でたまらなかつた。

その風に訴えるそばーちゃんは静かに、俺のことを教えてくれる。

「実はね。和ちゃんは一回だけここに来たことがあるんだよ。去年に一度だけ」

「俺が此処に来たことがある？」

それはサトの言つていた言葉と似ている。

——覚えていないんだ……？

——君はまた俺を忘れてしまうから……。

ということとは、もしかして俺は今年以外にもサトと会っていたのかもしれない。

何度も思った。

サトはカズって昔の呼び名で呼ぶし、何か俺のことを知っているって……。

だけど、それだと一つおかしな点がある。

「じゃあ、なんで俺にその時の記憶がないの？」

もつとも質問だと思う。どうして俺にはその時の記憶がないの？
なんで、俺覚えてないの？

事故とかにあって記憶喪失になったとか？

頭がイカレてるとか？

いろいろ考えを言ってみたけど、どれも違えばーちゃんは否定する。

「今日一回だけ言ったと思うけど、記憶が消されているんだよ。和ちゃんだけの記憶が」

そんなことができるのか？

確かにここにきてからあり得ない話ばかりを聞かされている。緑の神様がどうだとか、じーちゃんが緑の神様だったとか。

でも、記憶を消すってどういうこと？

本当にそんなマジックのような……それ以上なことができるのだろうか？

と、ばーちゃんに訊くと平然と「できる」と答えた。

……新しい事実ばかりが俺の中に上書きされていく。頭がどうも追いつかないようだ。

頭の中をゆっくりと整理しようとして下を向き、ゆっくりと目を閉じる。

俺は去年、此处に一回来たことがあって、その時の記憶が消されている。

緑の神様は何でもできて、緑の神様であつたじーちゃんは実際に何でもできた。

ということは、俺の記憶を消したのは、緑の神様。一つの可能性がよぎる。言いたくないけど、それしか思いつかない。

「もしかして、俺の記憶を消したのはサトなの？」
俺は目を瞑ったまま聞いた。

「……………」

ばーちゃんは黙っていて、うんともすんとも言わない。
きつとこれが事実だからだろう。

でもそれだったら、どうしてサトは俺の記憶を消したの？
好きだって言ってくれた。ほっぺだけど、キスもくれた。
それはサトの偽りの心？本当のサトじゃなかった？

俺のこと、サトは嫌いで俺の記憶からサトの存在を消した？
じゃあどうして、サトは俺のことをカズって呼んだ？嫌いだった
はずの俺の名前を呼んだ？思い出してほしかったからじゃないの？
好きって気持ちちが本当だからじゃないの？

分からない、分からないよ…………サト…………。

俺が難しそうな顔をしていると、ばーちゃんが優しく諭すように
言った。

「和ちゃん。惺くんが和ちゃんの記憶を消したのには『理由^{わけ}』があるんだよ」

理由。

「惺ちゃんはね。自分で緑の神様になるって言ったんだ。和ちゃんのために」

俺のために…………？

「そう。実は和ちゃんも緑の神様候補だったんだよ」

緑の神様候補。

神様に候補なんてあるんだなと変に感心してしまいそうになる。
「神様にだけ授けられた人間にはある特殊なものが見える。それは

——祠。神様の祠」

祠と訊いてみて、ピンつとくるのはサトとみた祠。ばーちゃんの裏にある蔵にある祠。

その祠が見えたことが神様の印だったと言うわけか。

この辺は何となく理解できた。

「この町の神様は祠と神の力を与えられた人間、一人のみ。でも爺さんが死んだ後、神様の祠が見えたのは二人」

神の候補になったのが、俺とサトだったと言うわけか……。

それだったら、俺がここに住めばよかったのに……。

神様だったサトを支えられるように、サトが一人で苦しまないようにと、俺がそのときこつち住めばいいはずの話なのに、どうして俺の記憶を消す必要があったのか、全く分からない。

「……この辺にしておこうか」

その言葉に驚いて、目を開けると、ばーちゃんは立ち上がっていた。

「ええ？」

ばーちゃんの目には大きな涙のたまっていた。苦しそうに嗚咽を堪えているのが、見て分かる。

「もう遅い時間……。和ちゃん、まだご飯食べてないから、ばーちゃんの握り作ってきてあげるっ」

そそくさと、ばーちゃんは台所に行ってしまう。

なんともキリの悪いところで区切られた話。本当のことを話してくれると言ったのに、どうして？ばーちゃん……。

俺は座敷に取り残されたまま、ボーっとしていた。

第20話「サトとカズ」（後書き）

20話目突入しました！！

ゴールデンウィークに終わらせることができなかったので、少しずつ書いて行きたいと思います。

この20話目は、書きたいことをたくさん書いてしまっで、分かっていくところが多々あります。

何度も書きなおしたのですが……難しいです。

読みにくいと言うところがありましたら、教えてもらえると有難いです。

この後も、小さな恋〜The green world〜をよろしく願います♪

第21話「夢と記憶の境界」

「はあ」

溜息一つ。いろいろな気持ちが混ざった大きな溜息。

お風呂の中だから、やけに溜息が響いて聞こえる。

何度も何度も出てくる溜息。

いろんなことを頭に詰め込んだせいで、頭が狭量オーバーしたに違いない。

……でも、それでも、知りたいと言う気持ちは消えない。

さつき、ばーちゃんが握りを持って戻ってきたとき、問い詰めようとしたのだけど……あまりにばーちゃんが辛そうな顔をしていたから聞きそびれてしまった。

「ぶくぶくぶくぶく」

顔を半分お湯につけて、息を吐くとぶくぶくとお湯が音を立てる。

この家にいられるのもあと少し。明日には、自分の住んでいる町に帰らなければならない。

まだ何にも解決してないのに……。

お父さんとお母さんがどうしてあんなに怒ったのか、とか。サトのことだってまだあまり知らない。

俺はどうすればいい？あとほんの少しの時間、俺はどうすればいい？

何もできないからって待っているのは、もう嫌だ。自分で何かを起こせるようにしたい。

ぐっ茶になった頭でいろいろ考えてみるが、なにも思いつかなくて、昨日と同様に疲れていつの間にかお風呂の中で寝てしまう。

* * *

「カズっ。ねえー見て。クローバーだよ!!」
誰かが俺を揺する。

目は開けてないけど、とても眩しいのは確かで。

俺は、ゆっくりと目を開ける。本当にゆっくりと…ゆっくりと…

…。

すると、そこには驚くべき人がいた。

驚きすぎて言葉も出ない。

「カズ!! ほら見てっ。クローバーだよクローバーっ」

サト……?

今の状況が全く分からない俺にサトは楽しそうに、クローバーを見せる。それは紛れもなくクローバー。

なんで、サトが此处にいるの? 不思議に思いながらも、サトに名前を呼ばれたことが嬉しくて、サトが見せてくれるクローバーに顔を寄せた。

綺麗なクローバーがある。

残念ながら、四つ葉のクローバーじゃないけど、サトは大喜びしている。

「こんなところクローバーがあっただ。知らなかった……」

周りを見渡してみると、今日サトと四つ葉のクローバーを見つけたクローバー畑の中にいた。

「綺麗だな、クローバー…。俺、ずっとクローバーが欲しかったんだ」

妙なことを言う。

というか、そういえば、俺…お風呂の中にいた気がするんだけど……。

俺には、さっきが現実が、今が現実か分からない。

クローバーはさっき俺と一緒に見つけた。それにどうして俺達仲直りしてるんだ?

そう考えれば、これは夢?

またも頭が混乱しそうだ。

「カズつ。三つ葉のクローバーの花言葉って知っている？」

「ううん……知らないけど……」

「希望とか……結構いろいろあるんだけど……俺の心に残ったクローバーの花言葉は」

サトは一瞬躊躇う。

どうしたの？というのと大丈夫だと笑って、誤魔化された。気がする。

「で、サトの心の中に残っているクローバーの花言葉は？」

話の続きを促すと、サラツと言ってくれる。

「クローバーとちょっと違うけど、クローバーは別名シロツメクサって言うんだ。そのシロツメクサの花言葉に……復讐心」

………。

血の気が引くのを感じる。

最後の言葉があまりにも、恐ろしい単語だったから……。

訊きたくないと思ったけど、その言葉をもう一度聞かなければならない。

サトの心の中から本当にそう思っているか、確かめるために。

「もう一回言って？」

「……復讐心」

鋭く冷えきった声と瞳。

それは、この窮屈な世界から出られないから……復讐したいという事？

それとも……俺に向けられた思いなのか？

第22話「夢の事実」

「復讐心って、どうゆうこと？サト？」

「そのままの意味だよ。俺はこの世界に復讐をする」

ホッとしたのは一瞬だけ、復讐と言う言葉が抜けない限り、安心なんかできない。

「駄目だよっつ。そんなことしたら。具体的になにするか分からないけど、復讐なんて……」

俺はサトの腕を強く握って、止めようとするがサトは汚いものを触ったかのように、俺の手をはらう。

「止めないで。俺は絶対、この世界を許さない」

鋭い目。引きしまった唇。復讐しようとするオーラ。

サトは決心を固まっていた。それでも俺は反対をする。

「駄目。そんな復讐なんてことつかちゃ駄目だっつ」

「カズがどういおうと俺はやる。いつどこでこの力を使えばいいわけ？それは今じゃないの？」

分かんない。

今の状況は何？

サトは一体どうしたの？どうしてこの世界に復讐をしようとしているの？

分かんない。

サトの気持ちも、この状況も、俺自身のことも分かんない。

「サト。今から使おうとしているのは何の力？」

「緑の神の力」

「それはこの世界の緑を守るために、授けられた力じゃないの？」

「それが俺だったってことは俺のものだ。誰にも俺を止める権利はない」

「サト？」

いつもみないサトの表情に俺は何も言えなくなってしまった。

優しく笑うサトの笑顔の欠片もない。

「使う」

サトは、小さな声でブツブツと何かを言い出した。

それはなんかの呪文なのか、サトは険しい顔で唱える。

「ねえ？サト」

もう俺がサトの名前を呼んでも届かない。

サトの周りにはいつの間にか黒い霧のようなものがまとっていた。

これは紛れもなく悪いもの。

「お願いサト。やめてっつ」

サトの体をゆすりながら、やめるように言っがやっぱり俺の言葉は届かない。

「サトーーーーー」

* * *

「和幸っつ!!」

突然母さんの声が聞こえた。

「和ちゃん」

ばーちゃんの声も聞こえる。

ゆっくりと目を開けると、そこには心配そうな目をした母さん、ばーちゃん。そして父さんがいた。

「ここは？」

周りを見渡すと、此处はばーちゃんの部屋だった。

「あんた。お風呂で寝てたからのぼせたのよっつ」

お風呂……………。

そっか俺はお風呂に入って眠くなって…………。

「あれ？サトは？」

両親では禁句だった言葉を言ってしまった。

でも、混乱している俺はそんな余裕はなかった。

「何を言ってるの和幸？」

母さんの顔はさつき見たサトと同じくらい険しい。

あれは夢？

「和ちゃん。さつきからずっと惺くんの名前呼んでいたよ」

「サトの名前？」

「じゃあやつぱりあれは夢だったのかあ……」。

「はあ……」

安堵の溜息が出た。

本当にサトが復讐なんて言うはずがないと思ってけど、あんなにモリアルな夢を見たからサトを疑いそうになった。

「夢でよかった……サトが復讐なんてするはずがない」

安心しすぎてポロツト言わなくてもいいことを言ってしまった。
俺の言葉にみんなが啞然とする。

「復讐？」

母さんは目を大きく広げる。ばーちゃんと父さんは口をポカーンと開けている。

「夢を見たんだ。サトがこの世界を復讐する夢を……」

——そう。あれは夢。

——本当に夢？

誰かが俺の頭の中に語りかけてくる。

「何？」

夢だつて言う証拠はどこにあるの？

今が現実だつて言う証拠はどこにあるの？

分からない。分からない。なにもかも分からない。

俺は頭を抱えるようにして下を向いた。

「和幸？」

俺の様子がおかしいと思った両親たちは、俺の顔を覗く。

「分からない……」

疑問符が俺の頭の中を支配する。何者かに取りつかれたかのように頭は、ギンギンと響くばかりで……。

「和幸っ」

大声で呼ばれているのは分かるが、答えることができない。

だんだん音が、耳が遠くなるように、遠い世界に吸い込まれるように、俺はまた意識を手放した。

四日目終了。

第23話「緑の真実」

「ねえ？知ってる？この世界は、綺麗だけど、本当はただそう見せてるだけなんだっ」

誰？

「俺達が見ているようなキラキラとしたものなんて、ないんだって……」

俺の耳元でそう囁くのは……だれ？

* * *

「カズツ死んじやだよっ」

目を開けた瞬間。サトの泣き顔が目に入った。ええ？此処ってさっきの……？

どうしたの？サト？

「カズツ目を覚ましてっ」

俺は起きているよお……。と体を起こそうとする。

「カズっ、ごめんカズう！！お願い、目を覚ましてっ」

ええ？どういふこと、これ……。

となりに目を瞑って寝ている俺がいる。これは錯覚？と顔を叩いたら痛かった。

混乱しているのは俺じゃなくて、サトの方。泣きながら俺にごめんごめんと謝っている。

——サトどうして泣いてるの？

と、サトの涙を拭うが、本人は気付かない。寝ている俺の手をギューっと握って、謝り続けている。

「サト？」

「カズツツごめん。俺が悪い。力を復讐になんかに使ったからっつ」

復讐したんだ……。

これが現実か夢か区別がつかないから、なんともいえない。

「惺くんつつ。一体どうしたの？」

クローバー畑の中に俺の母さんがいた。どうしてここが分かったんだろう？

「小母さんごめんなさい。カズがカズがつつ」

サトは混乱して、とにかく今度は母さんに謝り続ける。俺の姿を見た瞬間、母さんは大声で父さんと呼ぶ。

「和幸？大変よ凌ちゃんつつ。和幸がつつ」

ササツと走ってくる音がする。くさまみれになった父さんが出てきた。横たわっている俺を見て、父さんは顔を白くする。

「和幸。これは……と、とにかく家に運ぼう」

父さんは横たわって寝ている俺を抱きあげて、ばーちゃんの家に向かう。

俺もその後をついて行つた。

「惺くん。これはどうゆうことか説明してもらおうか」

俺を布団に寝かせた後、サトは俺の両親たちに質問攻めにされていた。

「ごめんなさい……」

しょぼんとしたサトが正座をしながら、座布団に座っていた。

「どうしてこんなことになったんだ」

父さんが強くサトを責める。

「ごめんなさい。俺がこの力を使おうとしたからです。その時カズが俺を止めて……」

サトの指先が緑色に光る。

とても綺麗な色をしている、まるで宝石のように。

「この力でこの世界に復讐をしようと思ったんです」

「復讐^{りよくせ}って——緑世町を？」

緑世？初めて聞く単語に俺は首を傾げる。

「はい。そして、俺はこの町から出ようと思ったんです……っつ。

カズと一緒に」

辛そうな声を精いっぱい出しているサト。

俺とこの町から出ようとした？

「君は、この町から出られないことを知っているよね。出たらどうなるかも。それなのにどうしてこんなことを？」

父さんは一つずつ丁寧に話し続ける。

「それでも、俺はカズと一緒にいたい。好きなんです、カズのこと
が恋愛対象として。なのにどうして一緒にいることが許されない
のでしょうか？」

小学生ならぬ、考え。それに両親は言葉を止まらせる。

「それは……」

両親の言葉を遮って話し続ける。

「俺達が緑の神様候補だからですよ。神に信で選ばれたものは、
この世界から出ることを許されない。それは俺達を決別させる。ど
ちらかが神に選ばれても結局は離ればなれになる。それだったら……
…この世界がどうになってもよかった」

サトはこんなにも俺のことを好きと言ってくれる。

それでも俺達は決別する運命？

——これは夢？現実？

まだ俺にはこの区別がつかない。

「惺くん。君は何かを間違っている。和幸も惺くんが好きと言って
いた。でもそれは友達としての好きじゃないのか？恋愛感情なんて
ありえない」

父さんの言葉に俺もそしてサトも絶句した。

どうしてそう勝手に決めつけるの？俺達の気持ちをどうして勝手に

に決めつけるの？

怒りがわいてきた。でも今、俺は父さんを怒鳴ることもできない。今の声は誰にも届かないから。

「小父さん、小母さん。俺は、カズが好きです。これは血の迷いで何でもありません。ただ本当にカズが好きなんです。何も知らない俺にいろいろ教えてくれた。遊びを教えてくれた。そして、幸せと言うものを教えてくれた。それを貴方達が奪おうとしている。俺は幸せを望んではいけませんか？」

……っ。

俺の頬をスーッと流れていく。これは涙。

嬉しいのか悲しいのか分からない。今の俺の気持ちは複雑に絡み合ってるから。

でも涙が流れてくる。滝のように涙が溢れてくる。

「ばーちゃんはサトを優しい声で諭す。

「^{サト}惺くん。幸せは望んじやいけないとは言わない。でも、この世界には惺君が必要なんだよ？和ちゃんもそうかもしれないけど、もう和ちゃんには神様としての力は失ってしまったから。もう惺君しか神様はいない」

それはどういうこと？

俺もサトも意味が分からず、その続きを促す。

「確かに和ちゃんは神様候補で、その力を使わないけど、それなりに力があった。でもさっきその力は消えてしまった。惺君を助けるために」

俺がサトを助けるために神様の力を使った？神様候補と分かっていたけど、俺自身に神様の力があつたんなんて思いもしなかった。

「なんで、お婆さんがそのことを……」

呆然と呟くサトにはーちゃんは自嘲気味に笑う。

「私の爺さんも神様だったからねえ……力を失うときの感覚が分かるんだよ」

「……………」

しばしの沈黙。

それでも俺の涙は止まらない。

しかし次のばーちゃんの一言で俺の涙はピタリと止まる。

「神様は一人。神様候補を破れた場合、その人に死が訪れる」

ばーちゃんの一言にサトも両親も俺も目を瞠った。

何？じゃあ俺死んじやうわけ？

横たわっている自分を見ているとだんだん顔を色が悪くなるのを感ずる。

これが死の前兆？

「それって。カズが死ぬっていうことですか？じゃあどうすればカズは死なないんですかつ！？」

サトは必至にばーちゃんに近寄り、答えを求める。

「一つだけ方法がある。その方法は惺君にとつてつらいことになる。それでも惺くんその覚悟あるかい？」

大きくサトは頷く。

「カズが死ぬより、それ以上に辛いことなんてありません！」

止まっていた涙がぽつりと、また溢れだす。

サトはこんなにも俺を想っていてくれる。

それが夢でもいい。サトがこんな風に俺を想っている夢を見られただけでも幸せだから。

緊張感漂う中、ばーちゃんは深呼吸をして言葉を吐く。

「和ちゃんの記憶を消すんだよ。惺くんの力で惺くんの記憶だけを」

その瞬間俺の中に何が溢れだすかのように、体が熱くなる感じがした。

真実を俺は今知ろうとしているのだ。

サトが記憶を消した真実を……。

「和ちゃんが、神様と言うものを惺君自身を忘れることができれば、和ちゃんは死ぬことはない」

遠い日の夢。

それは、俺の中に眠っていた記憶。

夢であつて、でもそれは本当のことでもあつて……。

ただ「緑の世界」に俺達の時間を隠されていただけ。

俺はサトを助けるために、自分の力を全部出し切つて全力で止めたんだ。

記憶がよみがえる。

サトとの記憶が体中から溢れてくる。

第24話「届かなくても、伝えたい」

「カズツ」

夢の中で、何度も俺はその名前を呼んだ。なぜ自分の名前を呼んだのか不思議だった。

置いて行かないで。一緒にいたいと。

これは想像だけど、もしかしてサトだったのかな？

必至で俺を呼んでくれたのかも知れない……。

俺がこの町から出た時、サトはそう感じたのかもしれない。

「友達だよ」

サトの初めての友達が俺だった。そう、俺から友達になろうと言い出したんだ。

「約束だよ」

遠い日の昔に約束した。裏切らないと……。

思い出す。昔の出来事が、サトと過ごした記憶が……溢れてくれる。

「サト……」

何度俺はサトの名前を呼んだのだろうか？

百回、千回、一万回？

もう数え切れないほど呼んだと思う。

「カズ……」

俺は何度サトにそう呼ばれたのだろうか？

百回ぐらいかな？そう思っていたの俺だけだった。

きっとサトは何千回と何万回と呼んでくれていたんだ。俺よりもずっと多く俺の名前を呼んでくれた。

ねえ……サト。今、サトに会いたいよ？

駄目かな？嫌われちゃった？

それでも俺は、サトの所へ行く。

だって言わなくちゃいけない。俺が記憶が思いだしたことを――

―そしてもう一度あの言葉を言いたい。
サト。俺は会いに行くよ……

* * *

ゆっくりと目を開ける。

目が覚めたというより、ただ目を瞑っていたんじゃないかと言うぐらい清々（すがすが）しい目覚め。

「……ばーちゃん？」

横目で隣を見てみると、ばーちゃんが優しいまなざしで俺を見ていた。

「和ちゃん。思い出したかい？」

「ええ？」

どうしてばーちゃんがそのことを……。

不思議そうにはーちゃんを見ると、微笑み返してくれた。

「ずっと惺くんの名前呼んできた。苦しそうに……でも嬉しそうに」

「ばーちゃん……」

「惺くんの所に行くんでしょ？ほら、時間ないんだから行きなさい」
最後の言葉は俺に諭すように、強い言い方だったけど、心のこもった言葉だった。

「ありがとうばーちゃん」

俺は急いで、サトの所へ行く準備をした。

パジャマを脱いで……あれ？

そう言えば、いつ俺パジャマ着たんだった？お風呂で寝て起きた時は、ばーちゃんの部屋にいたし……。

「ばーちゃん。俺なんでパジャマ着てるの？」

着替え終わった俺はばーちゃんに質問をした。ばーちゃんは呆れたのか、苦笑しながら答えてくれた。

「なんでって……凌さんが着せてくれた」
そうなんだ……。

ばーちゃんは複雑な顔をしてくる俺にポンスと背中を押した。

「凌さんも美代子も怒っていたけど、それはあくまでも和ちゃんのためなんだからね」

その言葉に笑顔で俺は頷いた。

うん。分かっている。俺を心配してくれてるの、分かっている。

それでも、俺はサトに会いに行くんだ。

父さん、母さんごめんなさい。親不孝かも知れないけど、今、俺にとって一番大事なのはサトだから……。

届かなくても、伝えたい。

俺は急いで、玄関を出た。

「母さん、父さん……？」

玄関出るとそこには真剣な顔をした母さんと父さんが待ち伏せていた。

「こんな時間にどこに行くの？」

空を見てみると、まだ太陽は上がっていない。今は大体…午前6時ごろだろうか？

「サトの所に行ってくる」

いつも通りの普通の声で両親に言った。

緊張していた。声が震えるかもしれないと思ったけど、思いの外普通の声が出ることに驚いた。

さつと両親の横を通りぬきようとした。

「和幸。お前は何かを間違っているんじゃないか？ 惺くんは男だぞ？ 恋愛感情なわけない」

何を言われても取りぬけて行こうと思っていたが、父さんの言葉を聞いて足を止めた。

聞いたことがあることをズラッと父さんが言ったからだ。

振り返って、両親と向きあう。

分かってもらわなくてもいい。それでも自分の気持ちだけは言わなければ。

ゆつくりと口を開く。

「人それぞれ、幸せの形は違う。俺にとって幸せと言うのは、サトと一緒にいること。……俺は幸せを望んではいけませんか？」

問いかけるように見つめると、両親は困ったような顔をする。もしかししたら両親は思っていたいるのかもしれない。

最後に問いかけた言葉は夢で見たサトの言葉だ。

「ごめんなさい。母さん、父さん。行つてきます」

両親に背を向け、サトの所へ走り出す。

早く会いたかった。

サトの顔が見たかった、声が聞きたかった。

昨日会ったばかりだけど、寂しくて……。

早く早くと足を走らせる。

「行つてらっしゃい」

後ろでそんな言葉が聞こえた気がする。

両親かばーちゃんか分からないけど、とても温かい声だった。

第25話「孤独・涙」

俺達、離れ離れになっちゃうね。
でも俺達の心はいつも一緒だよ。
近くにいないくても、ずっと心で繋がっているから。
きつとまた会える。

俺達の気持ち繋がっていれば…必ず……—

* * *

途切れ途切れだけど、サトとの思い出が溢れてくる。

「サト……？」

叫びながらサトを探す。今頃だがサトの家を聞いておけばよかったと思う。

どこにいろのサト……。

「サト……」

なぜか涙が出そうになる。寂しい……とてつもない孤独感に襲われる。

会いたい。早くサトの顔が見たい。そして声が聞きたい。

そう思いながらクローバー畑に続く道を走り続ける。

一人は寂しい。怖い……。

「サトお……」

ついに涙がぼろぼろと溢れ出す。

<一人という孤独>

サトはずっと経験してきたのかと思うと、俺までもが寂しくなつてつらくなって……。

ずっとサトの傍にいたい。

それは叶わない……今だけは。

きつと、いつかまたサトに会えるということを早く伝えたい。

一人じゃないって。俺もいるって。離れていても、心はつながっているからって……。

「サト……！」

息をあげながら、クローバー畑につく。

「はぁ……はぁ……」

クローバー畑を大きく見渡し、サトの姿を探す。

暗いということもあって、周りが見えにくい。サトが返事をしてくれないとわかりそうもない。俺は叫ぶように名前を呼ぶ。

「サト……！！！」

「……………」

それでもサトは返事をしてくれない。

どうすればいいのだろうか？

サトの家は知らない。サトが好きな場所はここ以外知らない。

返事をしないのなら、クローバー畑ないを探すだけ。俺はクローバー畑の中で必死にサトを探した。

今日しか会えない。

今日俺は帰ってしまうから。ここにいたいけど、今俺がいなきゃいけない場所ではないから。

必死に探す自分に突然笑いが込み上げてきた。あの時も必死だったと。

昨日サトと一生懸命、四つ葉のクローバーを探した。しかも二つ見つかって……。

サト、今何を願っている？

四つ葉のクローバーを持ったら幸せになった？

もし今この時サトが幸せなら、俺はサトには会わないから。

——何考えているんだろう俺……。

俺は思いつき頭を横に振る。

混乱してるんだろうな。孤独と不安で……。

サトに会いたい気持ちが、早く会わなければいけないという気持ちが焦るばかりで、自分の考えが纏まらなくなっていたんだ。落ちつけ、俺。そう自分に言い聞かせ、大きく深呼吸する。

「いい空気」

さっきまではそんな風に感じられなかった。

いつの間にか涙も止まっていた。

大丈夫。きっとサトに会える……。

そう思ったときだ。

「カズ？」

確認するような声で俺の名前を呼んだ。

誰なんてすぐに分かった。カズと呼ぶ人は一人しかいないから。

「サト……」

サトに会っただけで、さっきまでの孤独感が吹っ飛んだ。

第26話「二人の気持ち」

「カズ……どうしてここにいるの？」

ちよつと周りが暗いということもあって、サトの表情がよく見えない。

「サトに会いに来た」

「……」

サトは困惑しているのか、黙ったまま下を向いている。

ここに来てはいけなかったのか。

そんな不安がよぎる。

「カズ、会いたかった」

沈黙の後のその言葉。とても嬉しくて、つい頬が綻ほころんでしまう。

「サト。ギョーッとしてもいい？」

ずっと言いたかった言葉ではない。でも今、俺がほしかったのはサトのぬくもりだ。

暖かくて優しいサトを感じたかった。

サトはちよつと驚いた見たいけど、すぐに頷いてくれた。

暖かくて優しくここにサトがいると思っただけで、胸が熱くなる。けど、そのあとに待っていた言葉はとも冷たいものだった。

「カズ、もうこれで本当にお別れだよ。俺達はもう一緒にはいられないから」

「なんでそんなこと言うの？！サトは俺のこと嫌い？」

きついんじゃないかってぐらい強くサトを抱きしめる。でもサトは俺の抱擁を拒まない。

「違うよ。好きだから言うんだ。昨日も言ったけど、カズはまた俺のことを忘れてしまう」

どうしてそう決めつけてしまうのかわからない。

「忘れない！！大好きなサトのことを忘れるわけじゃないじゃん！！」

必死に反論しても、サトは寂しそうに首を振る。

「前にも言ったよ。緑の神様は一人だって、カズにもその素質はある。だからまた君はそのことを忘れなければならないんだ」

「分かんないよ？どうしてよ！！どうして俺は緑の神様のことを忘れなきゃいけない……っつ、ああ！！」

突然、そのことの記憶がよみがえる。夢でも見た。

緑の神様は一人。

それ以上いた場合、神様以外に死をもたらすこと。それを回避するには、神様候補の記憶を消すこと。

「思い出した？」

俺はサトの言葉に小さく頷く。でも、俺は一つ納得できなかったことがある。

「記憶を消すことが死を回避する方法？それだったら、今の俺は何？記憶を持っている、正確には思い出した俺は、もう死んでるはずじゃないの？」

サトはどう答えればいいのか詰まっている。

もしかしたらサト自身もちょっと困惑しているのかもしれない。

「その掟を誰が決めた？誰から教えてもらった？」

ちよつと言い方をきついと思うけど、問い詰めてみた。

「誰が決めたか分かんないし、実は誰から教えてもらったのかも覚えていない……」

きつと根拠なんてない。

もし、俺達の前に神様候補になって死んだ人がいたとしても、これが原因とは限らない。

なにも元とするものはないのだ。

「大丈夫。俺は死なない。またここに帰ってくるから、サトに会いに来るために」

強い瞳でサトを射抜く。

誰になんと言われようと、俺はここに帰ってくる。帰ってくる。

「緑の世界」

とても窮屈だけど、俺はとても好きかも知れない。

サトと一緒にいられる、唯一の場所だから……。

「ありがとう、カズ」

涙をぼろぼろと流しながら、俺にしがみついてくる。

「もう言わないで？」

俺は一つサトにお願いする。サトは不思議そうに俺の顔をのぞく。

「バイバイなんて、もう言わないで……」

サトにつられて、俺までもが涙があふれてくる。

昨日サトにバイバイって言われた時、どんなに胸が押しつぶされそうになったか。どんなに絶望したか。サトはきつと知らないだろう。

だから知ってもらいたかった。

昔のサトとの記憶は曖昧だ。

俺はサトのことをあまり知らない。サトは俺のことよりは知っているかもしれないけど、それでもわからないことのほうが多いだろう。

サトのことを知りたい。そして自分のことをサトにも知ってほしい。

総願いを託した。

「ごめん。もうそんなこと言わない。悲しませてごめんっ」

俺はよつぽどひどい顔をしていたのだろう。

サトはごめんごめんと何度も謝ってくる。俺が言わせてしまったという罪悪が少しある。

今はそれどころではなかった。俺の聞きたい言葉はそれじゃない。

「ねえ、サト。俺のこと、どう思ってる？」

「ええ？」

自分から言わないなんて卑怯だと思う。

でも今はサトからの言葉が欲しかった。その言葉を欲していた。顔を真っ赤にしながら小さな声で答えてくれた。

「好き……」

「俺も好き……」

するとサトは俺の肩をがっしりと掴み、俺に顔を近づけてきた。意味はもう分かったいた。

俺はゆっくりと目を閉じる。

ふわりと優しい感触が唇に……。

淡い淡いキスを、何度も何度も繰り返す。

くすぐったくて、笑うと、サトも笑ってくれた。

だが、ゆったりとした時間はここまでだった。

「う……んっ？……うんっっ！！」

突然俺の口の中に暖かくて柔らかいものが侵入してきた。

最初はそれが何なのか分からなくて、首をかしげていたが、それがサトの舌だと分かった途端、全身が熱くなった。

苦しいんだけど、恋しくて……。

サトの舌を追いかけると、サトは意地悪の笑みを浮かべた。

さっきまで初々しくて可愛いと思っていたのに、なんかいきなり豹変して……。

「カズ、可愛いね。キスだけでこんなに真っ赤になっただけ？」

……じゃあサトはそれ以上したこと……ってああ……！！何考えてるんだ……！！

キスそのせいでちょっとだけ頭がぼーっとしてるんだ。

もう少しすれば落ち着く。はず。

「カズ、好き。大好き」

切なそうに言われると、俺までもが切ない。きっと心がつながっているからなんだ。

気持ちがつながっているから、伝わっているからこんなにも切ないんだ。

「俺だって好きだよ……！！」

俺は舌を突き出すと、サトは甘い甘いキスを俺にくれたのだ。

キスに翻弄されていて気づいていなかったが、サトの片手に四つ葉のクローバーが握られている。ちよつとくしゃくしゃになっているけど、持っていてくれたことが嬉しかった。

サトも俺と同じように、探してくれてたのかな？

——もしかしたら、俺達をここで引き合わせてくれたのは、四つ葉のクローバーの力かもしれない。

第26話「二人の気持ち」(後書き)

次回最終話です。

エピソード

涼しい森の中歩いていた、俺達。

かすかに感じるのは、サトの手から伝わる温かさ。

ゆつくりと、一歩一歩、歩いていく――……

「カズ。今度はいつ会えるのかな？」

クローバー畑を出て、ばーちゃんの家に向かっていくとき、サトがぼつりと呟いた。

寂しそうだけど、どこか浮き浮きしている感じにも聞こえる。

「うーん。たぶん今年と来年は無理だと思う……でも、できるだけ早く。戻ってくる」

力強く手を握り合うだけで、不安がなくなる。

「電話はないから、手紙を書いてくれる？俺から送ると遅くなると思うけど……」

「うん。サトにいっぱい手紙送るねっ」

他愛もない話をしているともう目の前にはばーちゃんの家があった。ばーちゃんの家の前には、母さん、父さん、そしてばーちゃんが立っていた。

サトは怖がっているのか、俺の後ろに隠れてしまった。俺の服の裾がギュツと握っている。

大丈夫だよと笑いかけたが、実は俺自身も少し怖いなと思っている。

なんて言われるだろうか。

サトと別れるって言われるだろうか、と……。

「……………」

なんとはいないのか分からず、下を向きながら口を開けずにいた。

重い沈黙が俺の頭にのしかかる。

「お帰り。和幸、惺君」

「ええ？」

俺達は顔を見合わせた。母さんから思っていない言葉が返ってきたからだ。

「お帰り」

「お帰り二人とも」

父さんもばーちゃんも笑顔で迎えてくれた。答える言葉は一つしか思いつかなくて……。

「ただいま！！」

俺達も笑顔で答えた。

その瞬間だ。母さんが俺とサトをぎゅっと抱きしめてきた。

サトとは違う温かさを感じて、また涙が浮かんだ。サトの顔は見えないから分からないけど、きっと俺と同じ状況だろう。

「ごめんね。和幸、惺君。私がいけなかった。二人を離れさせようと思った私がいけなかった……っ」

母さんは泣きながら俺たちに謝ってくる。その時点で俺は母さんに何の怒りも感じない。

「俺は怒ってないよ。だって母さん分かってくれたんでしょ。俺達のこと」

「俺も怒ってないです。小母さんのカズへのためにしたことだと分かっていますから」

二人顔を見合わせて、笑顔で頷いた。

その姿を見た父さんは言う。

「大丈夫。きっと二人なら……この先何かあっても、乗り越えられると思う」

「大丈夫。カズちゃんと惺君が一緒なら」

父さんの目にもばーちゃんの目にも、少し涙が浮かんでる。ありがとう。

俺達のことを分かってくれて。

嬉しくて嬉しくて涙が止まらない。

「後10分だけ時間があるから、話をしてきなよ」

母さんの言葉に頷いて、俺達が初めて会った場所に、手をつなぎながら走っていく。

何もかもが始まった場所。

サトと俺のスタート地点。

「ねえ。カズ。左手を出して？」

訳わからず、左手をサトに差し出した。すると、サトは何やらポケットから出した。

それは紛れもなく、クローバーの指輪で。

「またここで会うことを誓いますか？」

嬉しそうな表情で言うもんだから、俺はそれ以上に嬉しくなってしまう。

「はい…っ！」

サトは俺の薬指にゆっくりと、クローバーの指輪を嵌めてくれた。俺の心臓はドキドキ、いいっぱなしで……。たぶん今の俺の顔は真っ赤だと思う。

サイズは少し大きかったけど、最高の俺へのプレゼントだ。

「ありがとう、サト」

「どういたしまして」

そう言ってギューっと抱きしめあった。

ずっとこの幸せな時間が続いてほしいけど……。

暫しの別れ。

それでも俺はサトへの気持ちは絶対変わらないから……。待っていて、サト。

触れるだけのキスをして、俺はサトに背を向けた。その時だ。

「いつてらっしゃい」

ええ？

後ろを振り向くと、サトが笑顔で、手を振っていた。
これは永遠の別れではない。

——また会おう。

そう意味が籠っている気がした。

「行ってきますー！」

俺はサトに手を振り、両親の元へ走って行った。
今の俺は多分、笑顔で溢れているだろう。

帰ってきたら、「お帰り」って言うてくれる。
そう願って——

エピローグ（後書き）

あとがき

こんにちは、彩瀬姫です。

無事、最終話を迎えることができました♪

このお話はゴールデンウィークという設定だったので、ゴールデンウィークに終わらせよう！と張り切っていたわけですが、見事に失敗し、一ヶ月かかりました。

途中で話がぐちゃぐちゃになって伝わりにくいところがありますが、その辺は今後直していけたらいいなと思います。

小説を書き始めて半年経ちますが、まだまだ上手く文をまとめられません。

頑張って小説を書き続けていきたいと思います。

読んでくださった皆さん、本当に有難うございました！！

2009年6月7日 彩瀬姫

番外編：小さな手紙

サト、元気にしてる？

ん？俺？ああ……俺は元気だよ？

最近なんか、サトのことをよく思い出すんだ。ちよつとぼーっとしているとサトの顔が思い浮かぶんだよ。四つ葉クローバーと一緒に見つけたときのあの笑顔。

もしかして、今がサトと出会った季節だからかな？

クローバーがたくさん咲いている。あつ、もちろんサトが住んでいたところみたいに沢山はないけど？

うん。楽しく過ごしてるよ。

——あれからもう3年かぁ、ごめん。一度も会いに行けなくて……。

中学受験は何とか受かったんだけど、授業について行くのが大変で……。俺、理科が苦手らしくてさぁ……全然分かんない。

サトは物知りだから、今度教えてもらおうか。

えっ？クローバーの意味？

もちろん覚えてるよ。なんたつて俺達の幸運のキューピットだからな。

今でも大切にサトから貰った指輪大切に持つてる。少しだけ色が変わってるけど……。

サトからの最初のプレゼントだから、大切にしてるのは当たり前前だろ？

早く会いたい。

サトの顔が見たい。サトの声が聞きたい。

そして、サトを思いつき抱きしめたい。

俺、頑張るから……

だから、待ってて。
時間が少しでもとれたら会いに行くから――

* * *

「和幸……」

誰かが俺を呼ぶ声が聞こえる。

――もしかしてサト？と思ってサトの名前を読んでもみるが、返事はない。

ただ怒声が俺の頭に振りかかる……

「和幸！！何寝てるのよつ。塾に遅刻するわよ！！」

母さんが俺を凄じ勢いで叩き起こす。

「塾……ってヤベっ！」

そうだ今日は週3回通っている塾があるんだつた。

俺は飛び起きてた。

寝る前まで書いていたものを裏返し、寝癖を簡単に直し、塾の力バンを片手に、階段を駆け降りる。

「行ってきます！」

急いで塾に向かって走り出した。

母さんは嘆息しながら俺を送り出した。

「あの子ったら……」

母さん――美代子は二階に上り、勝手に和幸の部屋に入って机にある一枚の紙を裏返した。それは、

「和幸からの惺への小さな手紙」

美代子は寂しそうな悲しそうな思いで紙を握りしめていた。
短くて拙いけど、和幸の気持ちがかもっていた手紙。
最後に書かれていたのは不器用だけど一番気持ちの伝わる言葉。

——サト、大好きだよ。

だけど、この手紙はサトへ送られることはなかったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8000g/>

小さな恋～The green world～

2010年10月8日13時53分発行